鬼灯や清原の女が生寫し

「鬼灯」「ほほづき」、又た酸漿とも書く。

「清原の女」「きよはらのぢよ」、有名な「枕草紙」の清少納言のこと。

鬼灯が、清少納言に其のまゝそつくり、といふのでなくて、鬼灯を鳴らしてゐる女性を、さやうに見立てたのであるが、「鬼灯や」と言ひ放したゞけでは、幾分無理である。如何に省略が俳句の武器であると言つても。

別に「清原の女」を女流畫家狩野雪信とする説もある。雪信は清原氏の女、狩野探幽の姪で落款に「清原」「清原女」などの印を捺したといふ。

されば「鬼灯や」は「鬼灯」の形を見る事になつて、それが雪信の畫とそつくり、と言ふ意に解されるのであるが、それでは「生寫し」が生きて來ない。

いづれにしても、言葉に適切でないものがあるとするなら、むしろ清少納言説にして、鬼灯を鳴らす女を、小憎らしく思つた、人情味を採るべきであらうか。

日は斜關屋の鎗にとんぼかな

「關屋」は「關所」。通行人を檢査する役所。昔は箱根、新井など東海道での有名な關所であつた。

關所には不時の用意に、當時の武具が立て揃へてあつた。

斜めに日のさした其の鎗に蜻蛉のとまつてゐる、嚴肅ながら靜穩な空氣を感じてゐるのである。

天下泰平な大御代の關所の感じでもある。

「斜日」「斜陽」など珍らしくもない漢語であるが、それを「日は斜め」と和樣に言ふと、如何にも横日のさす光線の感じが新たになるやうである。

名月にゐのころ捨る下部哉

「ゐのころ」犬の子。「下部」は男の召使、又た下郎。

意外な事實を名月に配したやうであるが、これも自然の諸相を廣く見る得意のところ。

畫題によくある「月下狗子」邊からの思ひつきも手傳つてゐるであらう。

十五夜の月の明るい夜、狗の子を捨てるといふやうな事柄に、作者がどういふ感興を持つたのか、所謂俳諧傳統の概念だけでは說明は出來ない。

大方作者は、名月の夜の明るさ、月の光の照り渡つた隈もない、其の皎々たるところを胸一杯に感じてゐるのである。そこに照らし出されるものは、皆其の光明に淨化されると言つた心持で、くつきりと描き出される其の形狀に、晝の太陽の明りで見るよりも、別な哀れと興味を催すのである。物の明らかに見える月下の感興なのである。「ゑのころ」といふのも「狗の子」といふより、何か無心に無邪氣にひゞく。其の捨てられた無心の狗の子が、如何にも鮮明に照らし出されてゐる。それが堪らなく哀れを籠めた嬉しさを誘つたのである。

この場合「下部かな」はむしろ蛇足と言つてもいゝのであるが、下部といふ人品恰好を、蕪村の畫心が添景にかき加へた位に見たいのである。

句の餘情として、下部を點出したが爲めに、狗の子に最も近き親しみを持つ、それを手がけた者の情愛も、仄かに匂つて來るであらう。が、無論それは、句の主眼ではない。

たゞ「名月に」と言ひ「下部かな」と尋常の形を取つた、そこに音調上の堅さがあるやうである。表現に巧みを弄しない美點？　であるやうであつて、どこか間のぬけた拙劣さを思はしめる。

月天心貧しき町を通りけり

「月天心」は、天の眞上に昇つた月、邵康節の詩に「月到二天心一處、風來二水面一時」とある。

これも前句と同じく、月光の極度に明るい、澄み切つたところを感じてゐる。

貧乏町のそこらの汚なさが、晝のやうに照らし出されてゐる、それを哀れみ興じてゐるのである。又た貧乏町のゴタ〳〵した處が、夜はさすがに靜まりかへつて、ひつそりしてゐる、其の靜かさをも味はつてゐるのである。「歩きけり」でなくて「通りけり」で、半ば通過した感じになるのが、天心の月を一層仰がしめる趣きを生ずるやうである。

この句初案の「名月やまづしき町を通りけり」では、表現に今一息と言つた處がある。

名月や雨を溜たる池の上

「雨を溜めたる池」は灌漑用の池で、事實は雨が溜つたのであるが、其の池の用途から言へば雨を溜めたことになる。

雨上りの滿々たる水を眼前の景にして月を仰ぐのである。

芭蕉の「名月や池をめぐつて夜もすがら」の別趣でもある。

芭蕉の句には、綿々として盡きない、愛著的の情味が籠つてゐるが、「夜もすがら」は、多少の誇張味を持つて、自然性に缺くるところがある。だから辯護して、夜もすがら池をめぐつてをりたい希望の心、と說明を附加したくなる。蕪村の句は、さういふ不自然性はどこにも感ぜられない。が、雨を溜めたる滿々たる水の上に、そをどう感じてゐるのか、感情の透明さが十分に通らない憾みがある。「雨を溜めたる」といふ動的表現——灌漑用の水の多い池、といふ靜的表現に比して——に煩ひされるのであるかも知れぬ。

其角に「池水も七分にあり宵の月」といふ先例がある。

名月や夜は人住まぬ峰の茶屋

「人住まぬ」は、通ひ茶屋の類で——茶屋の主は、夜は麓の自宅に歸つて——晝だけ商ひするのである。

さういふ峰の茶屋へ月を觀に登つたといふのであるか、又たさういふ茶屋を、名月の夜麓から望んだといふのであるか、それともさういふ茶屋を念頭に浮べて、そこでこの月を眺めたいと希望を述べたのであるか、この句では、その邊漠然としてゐるやうである。

たゞさういふ人里離れた、閑寂の境地——殊に四方を見晴らす高地——に於ける、月の明るさを感じてゐる、それだけが魂であるらしい。

「峯の茶屋に壯士かれいす若葉かな」の延長のやうで、それほど「峯の茶屋」の適切でない、作者の趣味性の滿足に偏した嫌ひなきにしもあらずであらう。

探題雁字

一行の雁や端山に月を印す

「探題雁字」、雁といふ字を題に課せられたの意。

「いつかうのかりやはやまにつきをいんす」と讀む。

「端山」山つゞきのはしの方にある山。自然堂々と聳えてもゐなければ、低く平らな心持がある。

其の端山の上に雁の一列が飛んでゐる、丁度そこに、地平線を上りかけた、十五夜の月も現はれた、其の偶然の——非常に際どい——光景を捕へたのである。

「雁字」の前書に照應して、雁の一列を文字に喩へ——古歌などに其の例がいくらもある——丸い月を落款の印と見たのだといふ子規說は要を得てゐる。

つまり例によつて、漢字を縱橫に働かした、技巧一點張りともいふべく、文字の綾に幻惑され且つ壓倒される。併したゞそれだけである。

この外、月の句は「中〳〵にひとりあればぞ月を友」と陳套な孤獨感、「櫻なきもろこしかけて今日の月」の月並な優越感、「忠則古墳」と前書した「月今宵松にかへたるやどり哉」、阿部仲麿の歌をふまへての「仲丸の魂祭せんけふの月」、萬葉集の歌に因む「かつまたの池は闇なりけふの月」、雨乞ひの故事を取つての「名月や神泉苑の魚躍る」、芭蕉の「奥の細道」の笠島の句に賴つて「旅人よ笠島語れ雨の月」、諏訪湖の傳說を背景にして「名月やうさぎのわたる諏訪の海」など、情味の薄い、半ば洒落の句が多い。名月といふ傳統觀念に支配されて、獨自の世界への飛躍を束縛された觀があるやうである。

三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲

「三度」「さんど」と讀むか、「みたび」と讀むか。

まだ鳴くであらうと待ち設けてゐたのが、もう聞えなくなつた、あとのしいんとした淋しさが言外に籠つてゐる。「三度」に言ひ知れぬ味ひがある。鹿の聲を、妻戀ふ哀れにのみ理智的概念化してゐた時代に、芭蕉の「ひいとなく尻聲悲し夜の鹿」と奈良での卽吟は、其の概念を破壞する、自然への還元、提唱であつたとも見られる。が、表現技巧から言つて「夜の鹿」あたりに、窮した痕跡がある。蕪村のこの句に至つて、芭蕉提唱の意を完結した趣きがあるやうである。この句初案は「三度啼て聞えずなりぬ雨の鹿」であつた。正名宛の書中にある。

「菜畑の霜夜は早し鹿のこゑ」は、更に轉じて奈良邊の客觀的寫生をしてゐる。「折あしく門こそ叩け鹿の聲」に至つて、益々鹿を自然化した感じである。

が、それにも關らず、蕪村には「雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり」だの、「鹿の聲小坊主に角なかりけり」「鹿寒し角も身にそふ枯木かな」など、角に拘泥した、理智の產物がある。眞に口惜しい限りである。

門を出れば我も行人秋のくれ

「行人」普讀しないで、「ゆくひと」と訓むのであらう。

「行人征馬」の成語によつて、行人——ゆくひとゝ讀んでも——には旅する心持がある。門一歩出れば、我も一個の旅人に過ぎない、と秋の哀れ、又た孤獨感を胸に祕めてゐるのであらう。

芭蕉の「この道や行く人なしに秋の暮」に影響されてゐる點もある。

「門を出て故人に會ひぬ秋の暮」とこの句の初案らしいものがある。

「去年より又た淋しいぞ秋の暮」「父母のことのみ思ふ秋のくれ」「さびし身に杖わすれたり秋の暮」「さびしさのうれしくもあり秋のくれ」「かぎりある命のひまや秋のくれ」「木曾路行ていざ年よらん秋ひとり」など、老懷の寂寞を、矢つぎ早やに訴へてゐるが、少々露骨に過ぎて本統の老懷味が迫らないやうである。

「あちら向きに鳴も立たり秋の暮」「こちら向きに立つ鳴はなし秋の暮」、「猿丸太夫の贊」として「我が手に我をまねくや秋の暮」「一人來て一人をとふや秋の暮」、これらの疊字には字面のおもしろさが主になつて、たゞ手段的なものしか感ぜられない。少々技巧耽溺と言つていゝであらう。

かなしさや釣の糸吹あきの風

釣りを垂れてゐる其の釣糸に秋風が吹く——糸の吹き撓む程度であらう——、それが悲しみを象徴するものになつて、悲哀感をそゝるといふのである。

「秋を概念的に悲哀化して、見るもの聞くもの悉く悲哀をそゝる、鋭敏な感傷——むしろ病的な——を思はしめるほど、デリケートな情緒である。」

面白いことには、この句、後に改刪して上五を「江渺々」と置いた。几董がそれに異論を稱へて、元の「かなしさや」に復せしめたと、如何にも手柄顔に、其の「新雜談集」に書いてゐる。

几董の「かなしさや」を主張する心持は、必ずしも釣は殺生をするものとか、又た秋は悲しいものとか、の理智的概念化に慰せられてゐるのではないであらう。たゞ不圖人生の悲哀を、釣する糸の上に感じたといふ程度で、そこに蕉門としての深みがあるのだ、と言つた几董らしい感懷であると肯首される。

「江渺々」と置きかへた蕪村の心持、餘りに感傷的であることを氣にした、どうも自分らしくないと思つた、詩的な懷疑にも亦た同感される。

「かなしさや」と「江渺々」では、全く方向を異にした別種の句になつてしまふ。一は女性らしい、神經の尖つた、物を悟り顔であるに對して、他は、大江の渺々たる眺望を擅まゝにし、

男性的な欣快に浸つてゐるやうな大まかさが窺はれる。主觀化と客觀化、悲哀觀と樂天的、そんな風にも相背馳して來る。いづれをいづれとすべきか、強ちに几董の主張を絶對正しいとも言へないと思ふ。

恐らく蕪村の漢語癖が、少々鼻につく感があつたので、又たかといふ心持から、「かなしさや」を主張したのが、几董の本心でなかつたであらうか。さう言へば「江渺々」も、例の手段と言つた臭ひがしないではない。と言つて、「かなしさや」も、少々物の底を割つてしまつた嫌ひがないとは言へない。

尙ほ、蕪村の自賛贊物に「浦さびし釣の糸吹く秋の風」といふのがある。第三の工案とも見られる。

秋の風書(しよ)むしはまず、成にけり

「むしはまず」、漢字は「蝕まず」、或は「むしばまず」と讀む。

蠹干・曝書は夏期にやるので、夏の季題にもなつてゐる。

蠹干をした書物を、秋になつて手にした時の感觸とでもいふか、どことなく淸らかな、もう

これなら大丈夫蠹もつかない、と心に樂しく頼もしく思ふのである。書を愛する心理の動きである。殊に平生の愛讀書でもあれば、尙更のことである。

併し、其の書を、夏期蠹干したものとは限られてゐない。どういふ書物でもいゝのであるが心の中に、夏の蠹干を考へて、蠹干をすればよかつたとか、よく蠹干をしたものだとか、さういふ過去に溯る過程的な心理から、この句に到達してゐるものと見たいのである。

たゞ書物を手にして、夏はよく蠹がくふが、秋は食はない、と言ふのでは、「成にけり」と決定的に强める心持は出來ないと思ふのである。

この句「なりにけり」と間延びのしたやうな結句が、却つて一句の重心になつてゐる表現は、たゞ字數が定型に足りないから、已むを得ず附け加へたと言つたやうな愚句とは雲泥の相違である。

「秋の風」は、主として秋を感じてゐるので、「風」は其の客觀化と言つてもいゝ。實際には、書物の上に、指のあたりに、又た其の身邊に、廣く言へばそこらの環境に、風の動きが、其の冷やかさが感ぜられてゐるのである。かういふ「秋の風」は、悲哀一圖の限定感でなくて、複雜な心理を象徴するとでもいふべきか、傳統觀念から、大分生活觀念に近づいてゐると言つて

いゝであらう。

秋風や、干魚かけたる、濱庇

「濱庇」は、濱近い家の軒端のこと。「浪間なき隱岐の小島の濱庇久しくなりぬ都へだてゝ」――增鏡、後鳥羽上皇――「浪間より見ゆる小島の濱庇ひさしくなりぬ君に逢ひ見て」――伊勢物語――など。

蜑の軒端には、よく魚が干しかけたり、又た吊るされたりしてゐる。其の實況を寫生的に叙したので、この秋の風は、干魚のぶら〳〵してゐる上にも、形象化してゐる。

ぶら〳〵動いてゐる干魚の上に哀れをよせたといふより、いつまで掛けてある干魚であらう、と暗に夏から秋になつた――干魚のいつまでも吹きさらされてゐる、又た今後いつまで吹きさらされてるかも知れない――時の長さを感じてゐるのが主であらう。必ずしも、和歌の先例によつたのではないであらうが。

この外「秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者」の蕪村張りがあり、「唐黍のおどろきやすし秋の風」と、唐黍の特性に思ひを走せたのがあるかと思へば「秋風に散や卒都婆のかんな屑」といやに無常がつたのと、「おもひ出て酢作る僧よ秋の風」と妙な庖厨を覗いたり、「金屏の羅は誰があきの風」と、堂上寵姫の憂鬱を味つたりしてゐる。が、さして取り出でゝいふ程の作はないやうである。

古人移竹を思ふ

去來去、移竹移りぬ、いく秋ぞ

「移竹」は田川移竹、京都の人、園と松木竿秋――淡々門――に學んだが、中途去來を慕つたと言はれてゐる。寶暦九年九月十三日歿、享年五十一。

「去來」は芭蕉門、有名な十哲の一人、寶永元年九月十日歿、享年五十四。

歿年の年號が寶永と寶暦、命日が九月十日と同十三日、俳號が去來と移竹。しかも移竹は淡々調に懐らず、思ひを元祿の去來に寄せたといふ。これ位いろんな點に似寄りのある場合も少ない。

移竹の句は、蕪村一派の句集「其雪影」――明和九年刊――、「明鴉」――安永二年刊――等に數句掲出されてゐる。殊に「明鴉」には「ちかき世の頃まで、ともに風流を語り合、あるは

席を同うせしも、今は世になき人のかたみになれる三ふし四章をかいつけ侍る」とあつて、太祇、召波、達布の三人と共に、其の一句が掲げられてゐる。如何にも蕪村一派の仲間扱ひである。

思ふに、移竹は蕪村より七歳の年長ではあつたが、蕪村の復古的俳風に關心を持ち、疾くに淡々風を遁脱しようとしてゐたのであらう。若し、今十年も壽を保つてゐたら、恐らく太祇と共に、明和末年の勃興的俳陣の一將ともなつてゐたであらう。蕪村の移竹を思ふの情は、たゞ古人を偲ぶのみではなかつた。

句は文字の掛け合せで、情熱の籠るものが、どこかへ逃げた憾みはあるが、かゝる文字の掛け合せの上に、一新機軸を開いた功は沒すべからずであらう。

これに類するのが「茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ」である。

順禮の目鼻書ゆくふくべ哉

この句は蝶夢の「松島道之記」——寶暦十三年刊——に掲げられてゐる。蕪村作としては古い方である。

順禮がふくべ即ち瓢箪に目鼻を書きゆく、といふのはどういふ場合なのか、手にふくべを持

つてゐるのか、それともふくべは道端に棚作りにでもなつてゐるのか、目鼻を書くといふのは「へのへのもへ」と言つたやうなものなのか、其の邊が甚だ曖昧である。自然作を味ふ餘地すらもない。

「蕪村句集講義」では、瓢箪を道端に垂れ下がつてゐる畑作りとし、一人の順禮が、それへ目鼻を書いて行く、順禮の行爲と解してあるが、扨て順禮が矢立のやうな筆墨でも用意してゐたのか、それは判然してゐない。又た順禮がさういふことをするといふのも、突如として自然感が薄い。

按ずるに、句は道端に垂れ下がつてゐる——長ふくべといふやうなのが——其の恰好の突如とした滑稽さを見つけて、通りすがりの順禮が目鼻でもつけさうだ、即ち書き行かん、と未來を想像したのを、現在に「書き行く」と言ひ据ゑたのでないであらうか、順禮とふくべの何らかの共通性を感じて。——第一解——。

ふくべは順禮の手にある場合で——貰つたか拾つたか、取つたかして——別に入用でもないから、手ずさびに、それへ目鼻のいたづら書き——爪で傷けるのでもよい——をしつゝ行くがそれはやがて捨てるものであらうことを思ひ、順禮の退屈な、やつれてゐながら、どこかユー

モアを持つ心持を諷つたのでないであらうか。——第二解——。

原因はともかく不明であるが、へのへのもへでも書いたか、又た目鼻をくり拔いたかしたふくべを、背なり胸なりに下げてゐた事實を見て、たゞ其の異樣さを寫生的に言つたとも解される。——第三解——。

「瓢箪に目鼻をつけたやう」の俗諺がある。青瓢箪と言つた顏——面長な——を輕蔑して言つた趣きである。それに因んで、「順禮の」の下に「顏は」が略されてゐる、卽ち哀れにやつれた青瓢箪のやうな恰好だ、といふ意でないであらうか。——第四解——。

いづれにしても、解釋の爲めの解釋で、要領を得たとは言へない。

腹の中(へ)歯はぬけけらし種ふくべ

種をとる時、ふくべの中から一つ〳〵出て來る、それを人間の歯のやうに見たてゝ——さう感じて——、人間の歯なら口の外へぬけるのだが、こいつの歯は腹の中へぬけたのかな、と半ば滑稽に、半ば妖味を帶びたものに種瓢を見たのである。擬人的なと言つても、どこか超人的な特異性があつて、洒々落々としたところがある。奇想といつていゝ部類であらう。

が、この句の出來る動機には、作者自らの老境に入つた、亂杭に歯のぬけた實感が主となつてゐるであらう。だから、老境自嘲の意も、ほのかに匂つてゐる。

御所柿(ごしよがき)にたのまれ顏のかゞし哉

「御所柿」「ごしよがき」は柿の種類、多く畿內地方に產す。

案山子は、田の稻、畑の粟黍などの稔る頃、雀や烏のおどしに立てる。

田か畑に立てた案山子が、そこらにある柿の木にでも賴まれたやうな顏をしてゐる、と自分の守るべき本分の田や畑の方には、案外無關心の體である、ひよんな形——大方立てかたがわるかつたのであらうが——をした樣子を、案山子らしいユーモラスなものに思つたのである。

御所柿を守る爲めに立てた案山子ではないであらう。

御所柿といふので、皇居を守る案山子、卽ち木曾義仲が、京都に上つて、狹猴にして冠す、などゝ笑はれた故事に思ひよせるのは、讀者の聯想で、句の餘情である。

「我足にかうべぬかるゝ案山子哉」のやうに、其の形狀の突飛な——大方柿の方を向いてそつくりかへつた——點をおもしろがつたのである。

「姓名は何子が號は案山子哉」例の漢語調であるが、かやうな擬人的な見方も、當時は珍らしかつたのであらう。否、蕪村以前にかゝる著想はなかつたと言つていゝであらう。この句、柳女賀瑞に與へた書中に「此かなはうたがひにて、數と云こゝろに通ひ候」と自註を加へてゐる。別に疑問にする必要はないやうに思はれるが。

故郷や酒はあしくも蕎麥花

酒はわるからうとも、蕎麥のうまいのがあればいゝ、それで滿足だといふ心持で、眼前に蕎麥の花のしろ〳〵としてゐるのを見てゐるのである。

田舍のふるさとらしい、又たその草ぶかいところを懷かしむ、淡い情緒である。

「ふるさとや」と最初に呼び出す場合、大抵故里は懷かしいと言つた概念がつきまとつてゐる。併し、其の概念を內容づける情景が、其の次ぎに描出されなければ、詩としての迫眞力はないことになる。そこに凡手と能手の岐れがあるのである。

宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ

一方は萩の名所、他方は蕎麥の名所、どちらがいゝであらう、と抽象的に言つたゞけであるが、そこに萩を思はしめ、蕎麥を偲ばしめる、或る具象化がある。詩の妙味とでもいふものであらうか。

上品な酒落であり、又た一寸した思ひつきであると言つてしまへば、それまでゝあるが、萩の宮城野、蕎麥の更科といふより、萩、蕎麥の自然現象に、深い感興を持つてゐなければ、容易に口に上らない言葉であると思ふ。言ひかへれば、この思ひつきは、單なる口頭禪には乘らない、深い經驗の上に咲く花なのである。

「題白川」と前置をして「黑谷の隣は白し蕎麥の花」がある。之は別な黑白の對比である。白川越え——京都から近江へ越える——に蕎麥畑でもあるからの思ひつきであらう。

「落る日のくゞりて染る蕎麥の莖」は細かい觀察ではあるが、描寫に念入れて、感興を逸した傾きがないではない。

それよりも「道のべや手よりこぼれて蕎麥の花」の方に、こぼれ咲きの哀れが籠つてゐるであらう。

沙魚釣の小舟漕なる窓の前

潮流又は風向きによつて、或る一定の場處に居らうとする、沙魚釣り舟の、窓前を去らぬ光景が、よく現はれてゐる。沙魚又は鱶釣りに經驗のある者でなければ、かういふ味ひには到達し難い。

嵐雪の「沙魚釣や水村山郭酒旗の風」は、沙魚釣りを景觀化した先驅と言つてもいゝであらうが、それは地圖的な大觀であり、蕪村のこの句は、更に沙魚釣りの內面的興味に探り入つて其の小景を捕へてゐると言ふべきであらうか。

百日の鯉切盡て鱸かな

「百日の鯉」は、徒然草第二百卅一段、「園の別當入道は、さりなき庖丁者なり、ある人のもとにていみじき鯉を出したりければ、みな人別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、このほど百日の鯉を切りはべるを、今日かき侍るべきにあらず、まげて申しうけんとて切られにける」とあるから來てゐるらしい。

徒然草では、百日の鯉を切るのは、料理の修業のやうであるから、句も亦た其の意をうけてゐるのであらう。單に人の饗應に百日も鯉を切るとは想像されない。

庖刀の試めし切りと言つても、百日もつゞけて鯉を切る心持は、どこか豪快味がある。又た牛を屠るといふより、清爽感に充ちてゐる。其の豪快清爽感を、百尺竿頭に一歩をすゝめて、更に鱸——秋の最も颯爽たる魚——を切らうといふのである。

「百日の鯉切りつきて」の詰つた語勢は、其の內容に打つてつけである。

かういふ豪快清爽味も、人生の一快事には相違ないが、特殊階級の興味に限られた、又たさういふ假感を愉悅するクラシックの臭ひもあつて、實生活に遠い憾みがないでもない。

尙ほ其角に「百日のあたら戀しや洗ひ鯉」と矢張徒然草を題材とした句がある。

「釣上し鱸の巨口玉や吐く」、牡丹の句の「閻王の口」に似てゐるが、恐らくこれ位鱸といふ魚を、極緻にまで想化した例は少ないであらう。尤も「巨口」は蘇東坡の後赤壁賦「巨口細鱗狀如二松江之鱸一」から來てはゐるが。

ひとり大原野のほとり吟行しけるに、田畠荒蕪して、千くさの下葉露をしのぎ、つれなき秋の日影をたのみて、ばつかに花の咲出たるなど、ことにあはれ深し

水かれ〳〵蓼歟あらぬ歟、蕎麥歟否歟

「大原」は京都の北、八瀬につゞく名所。

大原を獨りで吟行したが、田の畔も荒れ、千草の下葉は枯れ色をして、情ない秋の日かげにかすかな花の咲いてゐる樣が、ことに憐れであつた、の前書。この前書は歌詠みのやうな弱々した心持で書かれてゐる。

「蕎麥か否か」は「そばかひか」と讀むか「そばかいなか」と讀むか。

水は涸れ〳〵になつてゐる。そこらに何か草花が咲いてゐる、蓼の穗らしくも、蕎麥の花らしくもあり、又た穗とも花ともつかない、と其の蕭條たる樣に打たれたのである。前書の弱々しいのに比べて、句は高踏詩人の口吻のやうに、安價な情味を斷ち切つた、强さと張りがある。

リズミカルな言葉の運びは、彼の鋭敏な音樂的素質の豐富さにもよるが、普通のレベルの、妙にヒステリカルな悲哀に墮したくはない、或る心構へもほの匂ふやうである。——清新を欲し、創造を望む藝術的貪慾から——。

この句晩年の作であらうと思ふが、初期の遊行柳の「柳ちり清水かれ」の延長を思はしめる。例の定型律に對する反逆の一端でもあらうか。

小鳥來る、音うれしさよ、板びさし

秋になると、雁燕去來で、又たいろ〳〵の小鳥も渡つて來る。この「小鳥」は、その渡り鳥の一つである。一年に一度來る渡り鳥を念頭にしなければ、この句の味はわからない。

板庇をふむ小鳥の足音を感じてゐる、何と細かい聽覺の主の、やさしい心いきであらうと賞ひたい程である。

〻わたり鳥、雲の機手の、錦かな

「雲の機手」普通に「雲の旗手」と書く。

和歌の先例を見ると

天つ空雲のはたての秋かぜにさそはれ渡る初雁のこゑ——續後撰和歌集——。

しぐれ行く雲の旗手のをりからや山の錦も色まさるらむ——同——。
夕ぐれは月待つとても物ぞ思ふ雲の旗手の秋の山の端——續千載集——。

などがある。

渡り鳥には、其の渡り筋があつて、毎年略ぼ同じコースをたどる。それを山の上などに待ち設けて、囮をかけた網を張り、一舉に其の鳥を捕獲する「小鳥網」といふのもある。群をなして渡る時は、可なり壯觀でもある。

句はこの群がり渡る鳥の習性を豫備知識に持つてゐなければ、解し難い。

雲のはたては、和歌にもあるやうに、旗のなびくやうに、たゝまりつゞく雲の形である。そこへ渡り鳥の大群が渡りかゝつたのを、旗手の錦と歎美したのである。雲にも濃淡があり、鳥にも翼の明暗があり、時ならぬ空中に錦を織り成した、美觀壯觀なのである。

前句は書齋に籠つての作、この句は郊外曠原に出遊しての作。

「わたり鳥こゝを瀨にせん寺林」も群をなして渡る鳥を描いてゐる。西行の歌「聞かずともこを瀨にせん時鳥山田が原の松のむら立」の言葉をとつてゐる。寺林をさして鳥の渡つて來るそこが見どころ、と言つた意である。

瀨田降て志賀の夕日や江鮭（あめ）

「瀨田」は「瀨田の長橋」、「志賀」は「志賀唐崎の一つ松」で有名な琵琶湖の名所。

「江鮭」は又た鮎と書く。鮭に似て、背黑く腹白き淡水魚、大なるは二尺許、多く夏季に賞美して食ふのであるが、俳句では秋季になつてゐる。「和漢三才圖繪」にも「江州湖中多有レ之、（中略）四五月盛出、一尺二三寸、大者二尺四五寸、其小者五六寸、土人稱レ鱒、但扁ニ於眞鱒ニ」とある。

瀨田には雨が降つてゐるが、志賀の方には夕日がさしてゐる、と湖上を眺めた折節の景觀に打たれて、さうして其の湖中に產する中でも、名稱から形狀から、一種の感興を唆る江鮭を想起したのである。江鮭を水面又は水中に見たといふのでもなく、又たそれを料理して食ふたといふのでもなく、感じの上から、たゞ何となく、この景色の一添景としてふさはしく思つたのである。

立ち入つて言へば、瀨田は降り志賀の晴れてゐるこの景色の美は、丁度江鮭といふ魚の感じにそつくりだ、江鮭を感ぜしめる爲めに、かういふ景觀があるのだ、といふやうな心持であら

う。或はこの時の蕪村は、眺めわたす湖の水よりも、江鮭を感ずるので、頭の中が一杯になつてゐたのでもあらう。

併し、かやうな句法は、他に餘り類例がないので、やゝ無理に思はれる點もある。が、言葉は離れてゐても、感じのつながりがあれば、それで一句は完成するのであるから、一方から言へば、非常に詩的な、凡人の成し能はぬところであるとも言ひ得る。さうして、かういふ所に定型律の最長所が發揮されてゐるとも見られる。

尙ほ「幻住庵にて琵琶湖上月といふ題を得て」と前書した「月に漕ぐ吳人は知らじ江鮭」といふのもある。吳人は晉の張翰——吳の人——の故事で、秋になつて故郷の食ひ物がうまくなつた、と官をやめて歸つた人。其の吳人すら江鮭の味は知らない、と江鮭を絶讃した意で——句は文字の奇巧に傾いて、却つて意は淺い——、一面蕪村の江鮭に對する感興を知るたよりともなる。

駒迎（こまむかへ）ことにゆゝしや額白（ぬかじろ）

「駒迎」は、毎年八月十五日、諸國の牧場から馬を獻ずるのを、天皇親覽せらるゝ年中行事を

「駒牽き」と稱へ、其の駒が近江逢坂の關に著いたのを、朝廷から迎へに行く、それを「駒迎」と言つた事は「公事根源」「近江名跡案内」などに詳しい。

「額白」は額の處ばかりが白い馬、又た「月白」「戴星馬」ともいふ。

駒牽は一度に五六十頭もの馬を引きつれるのであり、又た天覽に供するのでもあるから、其の中に一際目立つ額白に對して、ことにゆゝしい、勇ましい、又たゐかめしい感じを持つたのにも、すぐ同感されるものがある。

元祿に「面ぶせもおつぼねゝこの額白、朝叟」があるが、この方は、お局の女のことを諷したので、蕪村の句の先例とは見なし難い。

秋の燈や、ゆかしき奈良の、道具市

奈良といふ土地柄、道具市の燈にも、別な趣きがあるやうで、ゆかしくなつかしい思ひをしたのである。

芭蕉の「菊の香や奈良には古き佛達」などが先入感にあつて、其の道具市の中に、煤けた佛體なども見えたのであらう。

「秋の燈や」と燈に秋を感ずるのは、例の燈火可親もあるが、奈良の古都の連想も手傳つてゐるのであらう。

道具市といふに、何か奈良の特定の市でもあればともかく、普通各地で見る、路傍の古道具店の並んでゐる場合として差支ないであらう。

「奈良坂や當歸畠の花一木」もあつて、一度位は奈良に遊んだこともあるのであらうが、今日までの文献には、それが見えない。

丸山氏が黑き犬を畫きたるに題せよと望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋

「丸山氏」は丸山應擧。

應擧との合作は、この外にも二三ある。

黑い犬であるから、それを闇と見たので、おのれ自身の闇から吼える——何かにおびえたか迂散くさいとでも思つたのか——そこに秋の夜半を感じさせる、の意。

應擧との交りは、さう親密といふ程でもなかつたので、他人行儀な挨拶のつもりもあつたのであらう、たゞの句でなく、一ひねり趣向を練つたところを見せてゐる。

穿つて言へば、畫はたゞの黑犬であるが、この犬尋常の筆にあらず、さながら吼る聲を聞くが如し、と多少お世辭を言つた意味もある。

甲賀衆の、しのびの賭や、夜半の秋

近江甲賀の忍術師が、どこかへ忍び込むかけをする夜半の秋である、の意。

普通の人でも、忍び込むといふのに、夜中の感じがある。忍術師の忍ぶのには、一層ひつそりした心持が深い。それがたゞの忍び込みでなくて、誰が一番上手にやるかの賭をするのである。殊にそれが最も夜の長い思ひをする夜更けであるから、これ位夜半の秋を感ずる道具立ての完美したものはなからうとも見られる。

之を誤つて「忍びの術や」と傳へた書もある。「術」ではない「賭」なのである。この一字にも蕪村らしい頭の冴えが窺はれる。

遠近をちこちとうつきぬた哉

「遠近」は「をちこち」。蕪村の草稿には、明らかに「をちこち〳〵とうつ衣哉」とある。尤も初案らしく「砧」が「衣」になつてゐる。之を強ひて五音に讀むのは、作者の意でない。

砧の音を主にして、それを距離に及ぼしてゐる、巧みな措字であるとより、むしろ破天荒な表現であると言つていゝ。

意は遠くにも近くにもであるが、「をちこち〳〵」と諧と破調にしたのは、聽覺に訴へる砧の音の直感からである。

謠曲「砧」又は、砧の音を「ほろ〳〵はら〳〵」と、打手自ら言つてゐるが、蕪村はそれを「をちこち」——又はォッコッ——と聞いたのである。ほろ〳〵はら〳〵より、却つて實感に近いやうでもある。其の音を音らしく表現するに、強ひて五音に「をゝちこち」としては、一句全體が壞れてしまふ。

尤も砧にもいろ〳〵あつて、其の由來や種類を古書によつて探ぐると、この蕪村の場合の砧が、どういふ砧を聞いてゐるのか、いろ〳〵紛らはしくなる。が、こゝでは矢張、昔の擣衣の

砧で、布を練り、又た白らげる爲めに、二人の女が向ひ合つて杵を使ふ、其の音をきゝすましてゐると解していゝであらう。

紙漉きの紙砧、海苔屋の海苔砧、足袋屋の足袋砧、又た奈良京都などには、白で絹を搗くのを砧ともいつてゐる。昔は大抵自家用布であつたから、糸も織り方も、手際よくなかつた。其の爲め砧によつて、それを練る必要があつたのであらう。朝鮮風俗は、今でも洗濯物を——手で揉まないで——棒類で打つてゐる。洗濯砧とでもいふべきものであるが、日本も昔は同じ習慣であつたのかも知れぬ。

句には關係はないやうであるが、既に過去の景物となつてゐるので、一言を費しておく。

うき我に砧うて今はまた止ミね

芭蕉の閑古鳥の句にも「うき我」とある。物うき我、憂鬱な我である。

うき我が爲めに砧を打つてきかせて呉れと言つたが——それをきいても餘り慰みもしない——今はまた止めてほしい、の意。

物を戀ひながら、又たそれに慊らなく、行コか戻ろか、と言つた憂鬱な心の、とつおいつす

る、眞情の複雜な動きが、この短かい言葉の上に、實に鮮明に現はれてゐる。概念化した生活遊離の假感でなくて、生きた人間の眞感其のまゝの迸ばしりである。近代人の心理の現はれである。

芭蕉の「砧打て我にきかせよや坊が妻」に比較して、其の時代性の差違が、明らかに看取されるであらう。

「うき人に手を打れたる砧哉」「小路行けば近くきこゆる砧かな」「聲深き庄司がもとの砧哉」「比叡に通ふ麓の家の砧かな」「この二日砧きこえぬ隣かな」「なつかしき忍の里の砧かな」「枕にと砧よせたるたはれ哉」「貴人の岡に立ち聞く砧哉」など、いづれも解し易く、又た一通りの單純さである。「石を打つ狐守る夜の砧哉」「異夫の衣うつらん小家がち」「迷子を呼べば打止む砧哉」の三句は、それ〳〵趣向を構へてゐるが、事實の描寫を主として、感情に徹しない憾みがあるやうである。

麓なる我蕎麥存す　野分哉

「野分」「のわけ」又た「のわき」、野を吹きわくる意。二百十日前後の大風。

暴風に荒らされて、山裾の我が蕎麥畑も、もう見るかげもなくなつてゐるだらうと思つてゐたが、案外にも、それは左程の被害もなかつた、の意。

心配から安堵への心的過程であるよりか、句面には現はれてゐないが、蕎麥の花の白〳〵としてゐるのに打たれた、色彩感が可なりに強い。そこら木も折れ、草も靡ぎ倒されてゐる、狼藉たる中に、蕎麥畑の一郭の白さがくつきりと眼に映ずる。「我がそば存す」の語勢は、其の色彩感の投影した、波動的發生なのである。

「麓なる」も、簡にして地勢を見せ、蕎麥畑らしい自然性を確立すると同時に、野分に對する安全感をも保證する意がある。

『門前の考婆子薪貪る野分哉』——門前老婆子は「碧巖錄」の語——も得意の破調で、お寺附近に住んでゐる人物の眞を描いて餘蘊なしである。「客僧の二階下り來る野分哉」、特殊の場合を捕へて、しかも自然性を失なつてゐない。「市人のよべとひかはす野分哉」は、市中生活者の間に、自ら發生する雰圍氣である。

「野分して鼠のわたる潦」「棒ついて庄屋殿見舞ふ野分かな」「船頭の棹とられたる野分かな」「岡の家の海より明て野分かな」など觸目の風景の中に、「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉」の繪

巻物の圖様も捨て難い。

角文字のいざ月もよし牛祭

「牛祭」は九月十二日、京都郊外太秦の廣隆寺で行はるゝ特殊の行事。紙製の假面を被つて、牛に乘つた行者が祭文を讀むなど、「都名所圖繪」「俳諧歳事記」などに詳しい。

牛祭だから「角」を呼び出し、「角文字」の「い」を持つて來て「いざ」とつゞける。「いざ」は俗語の「サア」と言つた心持。「サア行かう」「サア立たう」の類。

九月十二日であるから、翌日は十三夜の後の月頃。で「月もよし」といふ。「角文字」「月」の「つ」の音を重ねてもゐる。

牛祭を是非見ようといふのでもなく、又た其の異様な行事を讃美したといふでもなく、牛祭を思ふ心のはづみから、そゞろに起る——まア言へば他愛のない、自分でもほゝ笑ましい——ユーモラスな情意が、自づと言葉になつたといふやうな句である。だからこの言葉の意義を、一々常識的に演繹して、句の意味を探らうとしても、恐らく的をはづれる。ザックバランな辞けた行爲を、一々堅くるしく禮儀作法にあてはめるやうなものであらう。

さういふ意味に於て、文字の遊戯的嫌ひはあるが、或時の心の持ちやうに生ずる——一寸酒落れて見たいとか、穿つてやらうとか——情意の輕い動きを、其のまゝに生寫した、作者の創意に敬意を表してもいゝと思ふ。

本來牛祭といふものが、他に類例のないグロテスクなものであるから、時にはそれに平行して、情意の動きも亦た軌道をはづれるのである。この句に限つて、文字の掛合せを主とした技巧本位の作ではないと思ふのである。

「角文字」の先例は、其角にも「角文字やいせの野飼の花すゝき」がある。

物書に葉うらにめづる芭蕉哉

「物書に」「ものかくに」。

芭蕉の葉に何か書くのであるが、葉の表より裏の方がいゝ、の意。

「葉裏をめづる」と言へば、始めから表は問題にしないで、裏ばかりを見ることになる。「葉裏にめづる」と言ふによつて、表に書かうとして裏に移る、裏をめづる心持の複雜さが出るやうである。「に」の一字、たゞ不用意に置いたのではない。

池西言水――元祿以前――の句に「神樂歌書かん芭蕉の廣葉哉」がある。兩句を比較して、こゝにも明らかな時代性が窺はれる。

廣澤

水かれて池のひづみや後の月

「廣澤」は京都郊外嵯峨にある、北に衣笠山を控へた池、月の名所と言はれてゐる。

「ひづみ」は「ひずみ」が正しい。ゆがみ撓む意。

水が涸れて來て、水の滿ちてゐた頃には見えなかつた底の一部などが露出して來る、平らでなく、何となくひずんだ樣に見える、それに對して九月十三夜の、池の感じも、名月の頃とは違ふ、うそ寒い、頼りない心持を諷つたのである。

「水かれて池のひずみや」は、純客觀の言葉であるが、そは人間の容貌の老いるに從つて變化するやうな、池の面目の衰へを感じてゐる、作者の主觀の具象化に外ならないのである。

「廣澤」の前置を必要としたのは、それが觀月の名所であるからで、野中の無名の池でないことを明らかにしてゐる。

「泊る氣でひとり來ませり十三夜」といふのがある。何處に十三夜の感興があるのかを問ひたいやうで、又た十三夜らしい情緒の捨て難いものがある。一體名月と後の月、この季感の差異など、單り俳人の敏感の持つ內容であり、筆舌の盡くすところではないであらう。

日でりどし伏水の小菊もらひけり

旱り年であつたが、伏見から小菊をもらつたといふ、たゞそれだけの句。

たゞそれだけであるが、この內容に盡きない情緒の細かさが織り込まれてゐる。

なぜ旱り年に伏見の小菊をもらつたことが、作者の感懷になるのか。何か旱り年には菊がよく出來るとか、花が立派になるとか、又た其の反對に、菊の出來がよくない、といふやうな特別な事情があるのであらうか。伏見は桃の名所であるが、同時に菊の名所でゞもあるのか。又た買つたのではわるくて、もらつたのでなければならない理由があるのか。

さういふ事實上の因果關係は、若しあるとしても甚だ稀薄な、殆んど無いに等しい、現實そのものに對する、何といふことのない情緒なのである。かすかに匂ふのは、旱りの乾いた感じに或る潤ひを得た、といふ位のものであらうが、それも意識されるかどうか、家庭に於ける些

細な出來事に對しての、言ふことの出來ない仄かな愉悅に過ぎないのである。それは丁度小菊の花が、ほんのり香る程度のものである。併しこの仄かな愉悅は、今日の生活を樂んでゐる者の持つ家庭滋味なのである。早り年を感ずるのも、貰ふことを感ずるのも、伏見——京近いとは言へ、少し距離のある、そこに俳友のある——を感ずるのも、皆其の爲めなのである。

いでさらば投壺まいらせん菊の花

「投壺」又た「つぼうち」ともいふ。昔は古く周時代の遊びであつた。或る壺の中へ、矢の形をしたものを投げ入れる競技で、「事林廣記」「五雜俎」「西京雜記」「皇都午睡」等に來歷方法等が精記してある。

菊の咲いてゐる、其の美しさに誘はれると言つた氣持で、投壺といふ優美な遊びを一勝負やりませうと、乘り氣になつた、閑人の刹那の悅びである、「いでさらば」とハシかゝるやうに言ふ所以である。

この初案らしい「水桶に投壺まいらん菊の花」がある。水桶を投壺の壺の代りにしようといふ、滑稽を含んでゐる。が、菊の花との融合が疑はれるので、改作したのであらうが、それにしても菊の花は、聊か木に竹ついだ憾みを殘してゐるやうである。

菊作り汝は菊の奴かな

菊作るお前は、菊の召使ひ奴僕だぞ、と大いに興に乘じて放言してゐる。

かういふ誇大な、熱した酒のやうな、けば〳〵した、東洋風な、詩狂と言ひたい口吻は、其角の「爐開や汝を呼ぶは金のこと」又た「菊賣や菊に詩人の質を賣る」などのやうに、誰もが痛快がる俳人的常習と言つてもいゝであらうが、又た已むに已まれない、國民性の傳統的昂奮であるとも見られる。單なる放言でなくて、內に其の人を慈しみ愛する情愛がさゝやいてゐる。

元祿に「けふ菊の奴僕となりし手入れかな、肅山」といふ句もあるが、自己を冷觀してゐるのと、熱意のまゝ自己を露出してゐるのと、心境の相違は、全然別の世界である。

「手燭して色失へる黃菊かな」「あさましき桃の落葉や菊畠」「ほき〳〵と二本手折る黃菊かな」「二本づゝ菊まいらする佛達」など、それ〴〵に實境から來た、さも心の淸澄さを思はせる作がある。

むら紅葉會津商人なつかしき

「むら紅葉」は、むら芒、むら雀などの「むら」、群がり染む紅葉。

むら紅葉する中に、會津の行商人を見つけて——想ひ出すことでもあるか——懐かしく親しんでゐる。

會津商人に、何か特別な風俗でもあるのか、又た會津と紅葉に、歴史上の因縁でもあるのかそれらは固より不明である。

恐らく、作者は會津といふ地名を嬉しく思ひ、山の多い地理的想像などから——かねての東北の行脚などを追懐して、かういふ風景も亦た一興あり、と何となくうめき出した——蕪村の用語——のであらうと思ふ。

要するに、空想で捻出した作であらうから、レベル以上の情趣は出てゐない。

さういへば、紅葉の句に、蕪村の作として推稱するに足るものは殆んどないと言つていゝであらう。

「ひつぢ田に紅葉ちりかゝる夕日かな」「よらで過ぐる藤澤寺の紅葉かな」は普通としても、

「西行の夜具も出てある紅葉かな」「谷水の盡きてこがるゝ紅葉かな」に至つては、凝つて思案に能はずといふ趣きがある。「折得たる紅葉さてしも横ひらた」「茂山やさては家ある柿紅葉」はやゝ寫生的風致があるが、有名な「紅葉見や用意かしこき傘二本」は聊か理に落ちてゐる。

自然にも合性とでもいふものがあるのか、それとも蕪村は、餘り紅葉の景を好んで觀ることをしなかつたのか。

壁隣ものごとつかす夜さむ哉

芭蕉の「秋深き隣は何をする人ぞ」を、官能に訴へるものを綜合しての抽象的描寫と見れば蕪村のこの句は、官能に訴へる局部を捕へての直寫的叙述である。芭蕉は、人生に對する思索を深めて隣人に對してをり、蕪村は、今日の生活を享樂して隣家を眺めてゐる。

併しながら、「隣は何をする人ぞ」には多分に理智の影があつて、今一歩理智に踏み入れば、教訓であつて詩でない危險性が含まれてゐる。「物ごとつかす」は、純然たる感情の展開で、詩の本道を歩んでゐるものである。感情の淺深はあらうが、詩は先づ蕪村の正道を踏んで、後に芭蕉の境界に至るべきであらう。徒らに芭蕉を模して、詩の圏外に逸脱したもの、古今何ぞそ

れ箕で量るに足らんやである。

夜を寒み小冠者臥たり北枕

「小冠者」普通は「こくわんじや」小男。

小男が北枕で寢てゐる樣子に、秋の夜のうすら寒さを感じたのである。

「北枕」は俗に死人を寢かす方角として忌む習慣がある。そんな聯想も手傳つてゐるであらうが、それよりも、其の男の寢た樣が——事實は東枕か西枕か判然しなくとも——何となく北枕であるらしい感じになつたのであらう。北風、北を塞ぐなど、段々冬に向つて行く、寒い心持が「北」の字に含まれてゐる。

春の句にも「筋違に蒲團敷いたり」とか「誰が爲めの低き枕ぞ」とか、蒲團、枕など夜の寢具に特殊な興味を持つてゐる觀がある。句は其の同じ部類に屬すべきであらう。

俵して藏め蓄へ〳〵番椒

「番椒」の「番」は普通「蕃」と書くが、「和漢三才圖繪」にはこの「番」が書いてある。

唐辛子の赤い實は、それを干して、他日の用にしまつておく。漬物に交ぜたり、足の胼胝に貼つたり、又た小禽餌餉の病などにも利く。

紙袋にでも入れさうなものを、俵にまでして貯へるといふのは、少々事を構へて仰山にもきこえる。

が、作者はそこに秋らしい、秋の田舍の家らしい趣きを感じたのである。理論はぬきにして眞赤な唐辛子を俵につめて、さも永久に貯へておくらしい、その事柄に——豆とか麥とかいふなら普通であるが——冒ひ知れぬ、佗しいと冒ふか、つゞまやかなといふか、何か盡きない味ひを覺えたのである。

作者には、唐辛子といふ手近く無ければならないものでもなし、普通の家なら、左程澤山に作るといふものでもない、又たいつまでしまつておいても蟲のつく患ひのないものと言つたやうな潛在意識があつて、先づ意外なと思ひながら、其の光景を玩味するに至つたのかも知れぬ。

「唐書元載傳」に「籍其家胡椒至二八百石一」とあり、蘇東坡の詩に「胡椒銖兩多、安用二八百斛一」ともある。さういふ故事は特殊の場合であつて、この句とは全く趣きを異にしてゐる。田家自然の趣致を細かい心持で翫賞してゐるのである。

稚子の寺なつかしむいてふ哉

お寺に大きな、目じるしにでもなる銀杏があるのであらう、それが黄色く葉をそめて來る——實も落ちて、それを拾ひに行く時にもなる——ので、一層目立つやうになる。其のお寺を小さい子供がなつかしがる、と言ひつゝ、作者も亦た——往事を追懐して——なつかしいものに同感してゐるのである。

童心純情の現はれと言つた、清らかさと柔らかさが、しみ〴〵感ぜられる。

この句の初案らしい「子供氣に寺思ひ出す銀杏かな」がある。比較にならない程、稚拙である。外に「銀杏ふんでしづかに兒の下山哉」がある。鞍馬か横川邊の寺の稚兒を點出したのであらう。

いさゝかなおひめ乞れぬ暮の秋

「おひめ」「負債」。

僅かばかりの借金を催促されたのに、暮秋の感を起したのである。

蕪村時代は大抵年二季の拂ひで、盆と暮に限られてゐたやうである。蕪村の書翰に、この暮をどう越さうかと、愁訴したものが二三ある。僅かの畫料によつて生活してゐた窮乏の狀が想見さるゝのである。

この句も恐らく、實際經驗の告白なのであらう。九月の月末で、まだ借金とりに來る時機でないと思つてゐたが、それが來た。聊か面くらつてゐると、案外手輕いロであつたので、安堵の思ひをする。そこに淡い暮秋の感が湧いたのである。若し年末であつたとすれば、もつと急迫を告げてゐたであらう。

いさゝかの負債であるだけ、乞はるゝ者自身よりも、輕くそれを催促する者に同情した意も籠つてゐる。

外に「暮の秋有職の人は宿に在す」——官位のある人の自邸に籠居の體——。「行秋やよき衣著たる掛り人」——食客のぞろッとした不似合な風彩が、外に著る物もない身上らしい哀れ——などそれ〴〵に味ふべき句境を示してゐる。

冬之部

楠の根を靜にぬらす時雨哉

楠の木の根もとを、しづかに降り濡らしてゐるしぐれの樣。視野の限られた、或る局部を描出して、時雨の全景を玩味せしむる句法。時雨といへば、忽ちに降り又た止む、夕立性の場合もあるが、しと〳〵降りつゞく春雨性の味もある。句は其の春雨性の靜寂さを、しみ〴〵感じてゐる。

時雨といへば、芭蕉が俳諧の祖先と言はれる宗祇の時雨の句に思ひをよせてから、俳人と時雨には特殊な結びつきがあるやうに思惟され、次いで芭蕉の元祿四年の撰集が、其の「初時雨猿も小蓑をほしげなり」に因んで「猿蓑」と命名されてから、一層俳諧の極意でも示す神性を帶びた傾きがある。蕪村にも「しぐるゝや我も古人の夜に似たる」があり、其の句數も四十餘に達して、蕪村作中の大量を見せてゐる程である。

が、この句はさういふ傳統から超然として、獨自の境地に入つてゐると見ていゝであらう。楠といふ大樹の感を抱かしめる——同時に靜かな落着きを——ものに感懷の中心を置いての、

或る一點の凝視である。

時雨るゝや蓑買ふ人のまことより

定家卿の歌に「いつはりの無き世なりけり神無月誰がまことよりしぐれそめけむ」の先例にそは蓑買ふ人のまことより、と答案を呈したやうな、輕い言葉の洒落に出發してゐるが、雨の用意に蓑を買ふ、人情の眞に觸れてゐるので、其の文字の遊戯味が、却つて溫かな餘情を誘ふものになつてゐる。

漢詩或は和歌を出典としての轉和吟は、固と〳〵藝術品の模造であるから、詩人の潔しとして屢々試むべき道ではない。なぜなれば、そこには作者の創造を無視する第一條件が嚴存するからである。人の熟讀しない、緣遠い詩句などを出典とする習慣は、衒學以外の何物でもない、唾棄すべき詩人の冒瀆と言つていゝのであり、詩の本質を辨へない無智の夢でもある。强ひて出典に賴るとすれば、原詩原句の情意を離れて、自己の情意に換骨脫胎しなければ、幾百幾千の轉和吟も、終に土芥に等しいのである。

蕪村のこの「まことより」の換骨脫胎の妙は、其の好參考史料として尊重さるべきものである。

敢て繰り返して言つて置く。

古傘の婆娑と月夜の時雨かな

「婆娑」は「詩經」に舞ふ也とある。「圖繪寶鑑」にも「月夕獨坐、南軒竹影婆娑可レ喜、卽起揮レ毫」とある。物の影の動く形容なのである。

古傘の影を、月夜のしぐれ——急に降つたりやんだりする——に興あるものに見たのである。

几董宛の書翰には「古傘の婆娑としぐるゝ月夜かな」——恐らくこれは初案でなく書損であらう——とあつて「月婆娑と申す事は、冬夜の月光などの木々も荒蕪したる有樣に用候字也、秋の月には不用、冬の月に用ひ候字也と、南郭先生被申、それ故遣ひ申候、ばさと云響き、古傘に取合よろしき歟と存候、何にもせよ人のせぬ所にて候」と自賛してゐる。併し、韓退之の月蝕の詩に「玉階桂樹間婆娑」とあり、又た戴花の詩に「露濕三醉巾一香掩冉、月明歸路影婆娑」ともあつて、服部南郭先生の說には合はないやうである。むしろ蕪村自らいふやうに、婆娑の字音をとつて、竹や木の影よりも古傘の方が適當であるとするのは、何となく傘其の物の音——開閉する時か何かの——にも通はせてゐるのであらう。

「化けさうな傘かす寺のしぐれかな」と相似て、婆娑たる影に、或る妖怪味を感じてゐるらしくもある。「人のせぬ所」は正に達見ともいふべく、蕪村特得の緊密な句法であり、又た感興である。

「しぐるゝや鼠のわたる琴の上」「たえ〳〵の雲しのびずよ初時雨」「芭蕉忌、時雨音なく苔にむかしを忍ぶかな」「子を結ぶ竹に日くるゝ時雨かな」——子は實をいふ——、「しぐるゝやとあるところに鷺一つ」「さかばやし軒に年古るしぐれかな」「窓の人の昔がほなる時雨かな」など、いづれも實經驗の內容を持つてゐる。「蓑蟲の得たりかしこし初時雨」——蓑蟲は巢を纏うてゐるから——、「釣人の情のこはさよ夕しぐれ」などのユーモラスな主觀もある。「榎しぐれして淺間の煙餘處に立つ」「禪寺の廊下たのしめ北時雨」と意表に出るものもある。今更のことではないが、其の多技多能に驚かれるのである。

初冬や日和になりし京はづれ

京都の案外な初冬の寒さを知る者は、カラッと晴れた町はづれの、この安らかな光景に同感せずにはをれないであらう。雪とか雨とか、又は山茶花、枯芒など、外に色彩感を與へるもの

は、却つてこの感興を損傷する。晴れ〳〵した空の、日光の輝きに打たれてゐる、それだけで心は一杯なのである。

作者の度々經驗した純情の精選であるとも見られる。

居眠りて我にかくれん冬ごもり

「冬ごもり」は、寒さに堪へで、外出も稀に家に閉ぢ籠る、老境を思はせる節もあり、又た心の修行をする意もある。

「居眠り」は、しばしのうたゝね、眠れば我を忘れる、又た宇宙をも忘れる。浮世の煩はしさにあくせくしてゐる、我を忘れよう心持を、我にかくれん、と物のかげに隱れるやう、我を客觀して、巧みに、一ひねりひねつて言つたのである。自我の煩惱の强さを忘れよう希求の意である。

蕪村の場合として忖度するに、句を案じて成らず、畫筆進まず、文を草するに行詰つたやうな時、自らの迂鈍をつく〳〵感じて、姑らく我を韜晦したい氣にもなる、そんな心持にも思ひ到るのである。

冬ごもり燈下に書すとかゝれたり

「燈下に書す」は、文章なり、或は序跋なり、何年何月書二燈下一、と書く例は、蕪村が「寫於畫齋」と其の畫に落款したのと同じに、昔は一般的の習慣でもあつた。

「冬ごもり」の初五が、どういふ場合を意味するのか、その冬籠る者は誰なのか、作者か第三者か、一應は不得要領である。

大方、誰かの書いた——文章か序か跋か——に「三冬籠居書燈下」とでもあつたのを見て、作者の冬籠の情意を言ひ當てゝくれたやうな思ひをした、其の筆者と自己を一體に感ずる心持でないであらうか。わかり易く言へば、「冬籠り」の次ぎに「ゐて」とあるべきを省略した文法と見るのである。冬ごもりゐて燈下に書す、と書かれてゐる、丁度それは我輩の今の氣持そつくりだ、といふやうに。又た或る書物なり文章なり、其の結末まで讀んだ、冬籠りの靜かな、又た其の讀了したものに同感するやうな氣分で。

つまり、この「冬籠」は、作者の冬籠りと、燈下に書すとかいた主の冬籠りの双方にかけての意と見るのである。尤も作者其の人の冬籠り中、或る書を讀んだ感想ではあるが。

勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり

「勝手」は臺所、又た表玄關でなく、裏玄關の意。非常に親しい間柄か、目下の者、又た召使など、表玄關からの訪問を憚つて、裏玄關から入る例がある。

誰の妻子か知らないが、勝手まで來て、家族と話しでもしてゐるのを、それとなく感づいてゐる、冬籠り中の家庭風景。女の笑ひごゑ、子供の聲など入り交つて、襖ごしにきこえてゐるらしい、ほゝゑましい、物臭いなかにも一脈の華やかさを思はしめる。

芭蕉の「折り〳〵に伊吹を見てや冬籠」は、伊吹山を心の友とする芭蕉らしい心境。妻子と圓滿な家庭を作つてゐた蕪村は、この勝手への訪問者にも氣をひかれる生活實相に浸つてゐる。

この句初案「勝手には」であつたらしい。「には」では他の意味も加つて、言葉として柔か味を缺くやうである。尙ほ春の句に「御勝手に春正が妻か梅の月」がある。春正は蒔繪師であるから、梅の月の景を蒔繪と見ての思ひつきなのであらう。

「戸に犬の寢かへる音や冬籠」は、獨坐の靜かさを思はしめるが、「冬籠壁を心の山に倚る」は比喩が少しく露骨にきこえる。「賓食の調度のこりて冬籠」「變げすむ屋敷貰うて冬籠」は作意

が淺い。「桃源の道の細さよ冬籠」「冬籠心の奥のよしの山」は理智的假感の失敗と見るべきであらうか。「屋根ひくき宿うれしさよ冬籠」「信濃なる下男置けり冬籠」は蕪村の常套手段。

かしらへやかけん裾へや古衾

「かしらへ」「裾へ」は、澄みて讀むか、又た「かしらべ」「裾べ」と濁つて讀むべきか。

頭の方へかければ、足が出さうであり、裾の方へ掛ければ、上の方が空く、古い蒲團を著る貧居の樣であらう。

蕪村の大魯宛の手紙に「御句あまたいづれもおもしろく承候…當地社中みな〳〵御噂申出候、有が中にも、足を折て頭に餘すふとん哉、愚老三十年前の作に、かしらにやかけん裾にやふるぶすま、とわび寢の床に屈伸をさだめかね候、足を折て、坊主頭を憐たる才覺、愚が及びがたきところに候」とある。自分の作より、大魯の足を折ての表現を推稱したのであるが、これによつて蕪村の作意も明らかになるであらう。

虎の尾をふみつゝ裙にふとんかな

「虎の尾をふむ」は危難に瀕する形容。「書經」に「君牙、心之憂危、若踏虎尾涉春氷」より出づ。又た「龍の鬚を撫でる」ともいふ。謠曲「安宅」にも、關を無事通過して後「笈を おつとり、肩にうちかけ、虎の尾をふみ、毒蛇の口を、逃れたる心地して」とある。

如何にも虎の尾をふむやうな、怖ワ〳〵な恰好で、裾に蒲團を掛ける、の意。

折角の甘睡をさまさせまい、傍人の心づかひである。

「大兵のかり寢あはれむ蒲團かな」といふのもある。寢てゐる主を虎——怖い主人、又は身分の相違する、平生近づき難き人、又は平生大切に考へてゐる富貴の人——と見立てる心持も潜んでゐるであらう。自然旗亭娼家などに於ける妓女下婢などの場合も聯想さるゝであらう。

句面は落寞としてゐるが、著飾つた女、派手やかな蒲團などを描いて見ると、艶體な當意卽妙と言つた輕い味ひが無きにしもあらずである。蕪村の祇園遊びの一興と見るべきであらうか。

「いばりせし蒲團干したり須磨の里」は蕪村の皮肉性を思はしめる。「故郷に一夜は更くるふとんかな」はしんみりした情緒。「沙彌律師ころり〳〵とふすま哉」は、其角の「律師沙彌相剃りをして月見哉」の改案。一晉法師に與へた「嵐雪とふとん引合ふ佗寢かな」は、無論有名な嵐雪の「ふとん著て寢たる姿や東山」に因むが、又た色好みの一晉——蕪村の手紙にある——を

諷する意もあるであらう。「糊ひきて焚火得させつ古ぶすま」は、火を焚いて乾す意であらうが、例の文字の技巧が勝つてゐる。

茶の花や白にも黄にも覺束なし

茶の花は、白くも黄いろくも、色のはつきりしない覺束かない花——實際茶の花は、中の蕊の黄が多く、花瓣の白を壓してゐる——だと或る一點を凝視して、さうして、茶の花に對する淋しいやうな、冷たいやうな、見榮えのしない仄かな哀れを感じてゐる。

「手燭して色失へる黄菊」があり、「夕顏や黄に咲いたるもあるべかり」がある。白と黄のはつきり區別はありながら、時に紛らはしい感じを起すのは、畫家的な錯覺であるかも知れぬ。

風雲の夜すがら月の千鳥かな

雲、月、千鳥、風爽かなる中に交互亂舞してゐる。美しい動的光景である。其の中に、浪の打つ音、千鳥の鳴く聲のジャズバンドも聞えるやうである。

空想捻出の作であらうが、かやうな錯綜した動的空氣を、一糸亂れぬ整然たる表現に達して

ゐる、技巧の冴えを思はないわけには往かない。尤も他に「打よする浪や千鳥の横ありき」などの細かな動作の寫生句もあるから、一概に千鳥を實際に見てゐないと斷定もされない。

「磯千鳥足をぬらして遊びけり」は、去來の「荒磯やはしりなれたる友千鳥」と比較して——荒磯と言ひ、友千鳥といふ措字に注意して——、ずつと自然描寫的になつてゐる時代性を考へさせる。

京都は加茂川に來る千鳥がある。「羽織着て網もきく夜や川千鳥」「加茂人の灯を燈る音や小夜千鳥」などの景物になつてゐる。この加茂川千鳥と、海邊に住む千鳥と、動物學上の關係はどうなるのか。又た古來千鳥の名稱について、種々の說もあり、千鳥の正體が一般には徹底してゐないやうである。俳人には俳人的想化した千鳥の季感があつて、動物學上の研究など、そつちのけにした特定のものを持つてゐる。加茂川千鳥の實際感と、俳人特定の季感と、蕪村に於ても判然たる區別を考慮してゐなかつたのでないかと思はれる。

だから「湯あがりの舳先に立つや村千鳥」「便船のこたへつれなき千鳥かな」などはまだいゝとして、「浦千鳥草も木もなき雨夜かな」「淡路島、島山や夜著の裾より朝千鳥」などの空想遊戯も生れるのでないかと思ふ。

鷗、アジサシの類をも千鳥といふのか、それとも海千鳥、川千鳥に特種な鳥があるのか、傳統觀念に盲從する以外の檢討もあつていゝやうに思ふ。

水鳥や舟に菜を洗ふ女有

或る廣さを持つた沼か、川か、一方には——先づ遠景——には水鳥が浮いてゐる、一方には——大方近景——には女が舟で菜を洗つてゐる、それが景色の中心であり、又たそれで景色の釣合ひと雰圍氣を形づくつてゐる、水邊のしつとりと靜かな光景である。

「水鳥や」と「舟に菜を洗ふ女有り」の上下の言葉の釣合ひ、描寫の粗密にどうかと思はれる節があり、「女あり」も餘處々々しい冷たい言葉のやうである。尤も人間的な熱情を以てこの景色に對してゐるのでなく、一寸スケッチすると言つた氣分から、水鳥も舟も女も、景色の一添景的自然と見てゐるのであらうが。

「鴨遠く鍬そゝぐ水のうねり哉」とこれによく似た句もある。「水鳥や枯木の中に鷲二丁」も、遠景近景の對照である。遊覽的な鷲籠が、冬木の中に休息してゐる場合であらう。

芭蕉の「芋洗ふ女西行ならば歌よまん」は芭蕉初期の句で、まだ檀林調を脫してゐないが、

さういふ悪洒落を洗ひ去つて、純客觀に解脫すれば、蕪村の菜を洗ふ女になるであらうとも見られる。

宗任に水仙見せよ神無月

阿部宗任の囚はれて京都に來た時、梅を見せて何ぞと問うたところ「我が國の梅の花とは見つれども大宮人はいかゞいふらん」と一首を詠んだ、といふ傳說がある。東北の豪族、東夷のたぐひであるから、雅びな梅の花など知るまいと思つたのが、案外和歌を卽座に詠んだといふ宗任辯護の傳說である。

それに因んで、神無月の十月ならば、宗任に水仙を見せてやれ、さすれば宗任が何と答へると言つた意であらう。

二月であつたから梅を見せたのであるが、十月なら、さしづめ水仙を見せるところ、と言ひながら、宗任には梅より水仙の方がふさはしいといふ意も含めてゐる。さうして、水仙を見せても、矢張大宮人を辟易させる歌を詠むだらうの偶意もある。

これも言はゞ宗任辯護の句。

出典による洒落半分の作ではあるが、宗任と水仙の對照に——凛々しい雄將と淸楚其ものゝ水仙——言外の風味がある。之を「老女の晝に」の前置で「小野の炭匂ふ火桶のあなめ哉」と小野小町を出典とした句などに比して、ネチ〳〵しない、男性的のサバ〳〵しさが感ぜられる。

千葉どのゝ假家引ッたり枯尾花

大方、源賴朝の催した富士の卷狩の連想なのであらう。

「千葉」は關東八平氏の隨一。

卷狩も終つて、それ〴〵の假家も取り拂はれた中に、枯芒のみの目立つ、荒凉たる景。

千葉殿でも和田殿でもいゝやうであるが、千葉常胤、其子胤賴などゝいふ賴朝擧兵當時よりの譜代の功臣であつた豪族の假屋は、殊に目立つてゐたであらう想像もあり、「チバ」といふ語呂の口に乘りよい關係もあるのであらう。

「千葉殿の假屋ひけたり」を、若し卷狩の連想でないとしても、何事か武備に關して急造の假屋を必要とした、事件的な場面は想察される。同時に其の事件の終りを告げた跡の——兵馬戰亂の跡といふほどでなくとも——光景と見ることも出來る。

さういふ全體的の事件に觸れず、たゞ假屋のとり拂はれた一場面だけを點出して、過去にも全局にも、感興を溯源伸展せしむる老手に敬意を表したい。

うづみ火や終には煮る鍋のもの

火を長く持たせるため、灰を深くかけておくを「埋み火」といふ。爐又は火鉢、火桶などの場合。夏秋の間は火鉢にも用はない。冬に入つて始めて火の煖をとる。昔は萬事につゞまやかであつたから、煖をとるにも灰深く埋めたのでもあらう。東北の寒地に行くと、それぞれの火鉢に、大きな炭を灰深く埋めて、上部には僅かな火を露出する。其の埋めた炭の火になるを掘りも起さず、却つて煖をとるによいともいふ。さういふ籠つた煖をとる意もあるのであらう。

とろ火で水煮するとか、又た佃煮、汐昆布など、とろ火で煮ることは何處の家庭にもある。この場合は、さういふ臺所でする煮物でなくて、平生鍋などかけない、火鉢又は爐に庖厨の具を見た、貧居又は佗住居の様にも興をひいてゐるのであらう。

いつ煮えるかもわからないが——煮えてゐる様子もないが——、これでいゝので、おしまひには煮えるのだ、と長い思ひをしつゝ、鍋に氣をひかれてゐるのである。

が、「終には」は、未來を理智的に想見する意が濃くて、現在の遲々として煮える様子もない、頼りない、それをぢつと堪へてゐる心の暗さと言つた氣分は直寫されてゐないとも見られる。つまり、餘りに克明に決斷を急いだ思ひがするのである。もつと煮えるか煮えないか、決斷のつかない逡巡したものがあつていゝのではないか、其の方が實感に近いのではないかと思ふのである。「終に夜を家路にかへる鉢たゝき」も同じ病弊を持つてゐるであらう。

これに比すれば「われぬべき年もありしを古火桶」の方が、火桶に對する愛惜の情が、何らの紛れなく直寫されてゐる。

「裙に置いて心に遠き火桶かな」、は非常に理智が働いてゐる。「裙において」は、手近くの意で、手近くにありながら——火ののろい爲めもあつて——心には遠くにある思ひの意である。「裙」を蒲團の裙と見て、行火の類とするのは、「置て」の措字に當て嵌らないであらう。「炭團法師火桶の穴より覗ひけり」は蕪村一流の擬人法。「火桶炭團を喰ふこと夜毎〳〵に一つ宛」と併稱すべき破調の作でもある。

腰ぬけの妻うつくしき巨燵かな

「巨燵」「炬燵」「火燵」いろ〳〵に書く。

これも掛香の啞の娘と相似た蕪村の小說であらうが、適材適所、置き得て妙なりと拍案したい。

大方こたつの櫓の上に、顏だちの美しい、淸秀な眉目の陰見する、それを腰ぬけの女——女房——と知つた時の、覺えずこみ上げるユーモアな氣分なのであらう。啞の娘の哀れよりも、遙かに罪のない笑ひである。火燵といふ道具を使つて、腰拔けの醜態を包むところ、人形使ひの妙手と言つた感がある。

外に「宿かへてこたつうれしき在り處」「去んで來る人むつまじきこたつかな」など、これは實感に卽する作がある。

鋸の音貧しさよ夜半の冬

「鋸」「のこぎり」。

夜中に鋸を使ふなど、いづれは貧乏大工の夜業でもあらう。だから、鋸の音まで貧しくきこえるといふのでなく、挽く音の捗々しくない、冴えない、鈍い濁りをきいて、冬の夜半の寒さと靜かさを感じてゐるのである。刄の立つた、心持よく挽く鋸の音なら、どこか豐かな、耳に快い、豐かさが感ぜられるであらうが、それと反對な音に對する、いろ〳〵の感じを綜合して貧しと言つたのであらう。

どこかに、我が迂鈍な貧生活を、其の音に思ひ及ぼしてゐるであらう匂ひがする。

「飛驒山の質屋とざしぬ夜半の冬」は、紅葉の會津商人など〻同じく、作者の名所好みである。たゞ「質屋とざしぬ」では平俗に陷る患ひがあるので、大きく「飛驒山」と舞臺を擴げたのであらう。「高麗船」「揚州の津」「指南車」と支那朝鮮まで眼界をひろげた餘勢でもあらうが、鬼面人を嚇すと言はれても致方のない空想の失敗である。

息杖に石の火を見る枯野かな

「息杖」「いきづゑ」。重荷を背負ふ者の持つ杖。それを支へにして、一息入れる——一休みする——からいふのであらう。

息杖のつき具合によつて、石から火を發する——普通に有り得べき事の樣でもないが——其の刹那の火光を、枯野の荒涼とした中に見たのである。其の火を見た瞬間の心の驚き、一種の

色彩感、ほのかな恐怖心などが、枯野の寂寞たる感じと融け合つて、更らに一層其の淸らかな淋しさに打たれてゐるのである。複雜な心の動きを、純客觀化してゐる、この手法にも注意される。

これを常識的に見れば、杖と石の衝突によつて火を發することなど想像されない。作者の奇を好む虛構であるとも見られる。が、作者は其の火を見た——認識した——刹那の官能の印象を主とするので、事實火を發したかどうかを問ふの要はないのである。或は燧石を打つやうな音——石が打ち合つて——がしたのを、火と認識したかも知れぬ。又た微細なものゝ飛び散つたのを、火を發したと思つたかも知れぬ。眼の錯覺を質す間もなく、火を印象することが、枯野に對して、堪らなく詩情を衝擊した核心であつたのである。それはやがて、作者が明らかに火を見たことになるのである。

言ふまでもなく、重荷を背負うてゐる人物などを、こゝに點出するのではない。又た息杖に力が籠つてゐるから、それで火を發するのだ、といふやうな原因結果を問ふのでもない。作者の眼は、たゞ一點、走る刹那の火花に燒きついてゐるのである。枯野の保有感と、石火の現實感、其の間に捲き起される自然の葛藤で一杯なのである。

強ひて穿鑿すれば、枯野の寂寞たる中に、物の干からびた、乾き切つたやうな感觸がある。そこに火を念ふ契機があるかも知れぬ。焚火の火、燧石の火——煙草を吸ひつける——、又は燎原の火などでなく、自然發火の石の火を念出する、それがたゞ好奇心のみの發作心理であり得るであらうか。

たゞ遺憾に思ふのは、この表現のもつと印象的でない點である。客觀化して、事實を明らかに叙述する必要もあるであらうが、「息杖に」の「に」、「石の火」の「の」、及び「を見る」などの手爾波の挿字が、事相を分解して說明してゐるやうな嫌ひを生んでゐるのである。作者の感懷は、もつと刹那的で、もつと動的で、又た熱意的である筈である。つまり作者の持つ情緖と表現のそぐはない、冷靜と固定を感ぜしめるのである。尤も複雜な事相を、感銘を、こゝまで表現し得た苦心を想察しないのではない。たゞ望蜀の念をいふのである。

馬の尾にいばらのかゝる枯野哉

そこらを通ふ馬の尾が、道ばたにある茨にひつかゝる——實際ひつかゝるのでも、ひつかゝるやうな思ひをしたのでもいゝ——、そこに枯野らしい趣きを感じてゐるのである。

總てが枯死の狀態にある中で、茨のとげ〳〵しさが著しく神經に障る、如何にも微細なことに刺戟されてゐる敏感さが思はれる。

繋ぎ放してある馬の尾が、灌木の枝や、强い莖の草にひつかゝつてゐる光景は、何人もよく經驗する所であらう。それを枯野に持つて來た、といふと語弊があるが、蕪村も其の經驗をここに蘇らしたのであらう。

普通の叙法から言へば、「馬の尾のいばらにかゝる」でなければならない。が、作者は主として茨のとげ〳〵しさを感じてゐる。茨の方から働きかけて行くやうにも思はれてゐる。「に」と「の」を轉倒したのは、文法として異例であるが、感情表現としては正道なのである。

尙ほ外に「蕭條として石に日の入る枯野哉」がある。「てら〳〵と石に日の照る枯野かな」の再案なのであらう。「山を越す人にわかれて枯野かな」「眞直ぐに道あらはれて枯野かな」は共に實情卽景。

菊は黃に雨疎そかに落葉かな

「疎そかに」「おろそかに」。

「おろそか」の語意は、粗略に、なほざりに、又た輕々しくである。「雨おろそかに」は、雨らしく降るのでもない、バラ〳〵雨が粗略に、かるゞしく降る意である。

咲き殘つてゐる黃菊に、そこら立木の落葉がしてゐる、そこにバラ〳〵雨の音をきく、前庭又は後圃の卽景である。

「菊は黃に」は、たゞの黃菊といふ感じではない。大抵の菊は枯れ果てた後までも、尙ほ黃な色を保つてゐる——恐らくは小菊類——殘存の意をこめた心持なのである。詳しく言へば、永く保つてゐる小菊の中には、追ひ〳〵本來の色を失なつて變化して來るのがある。桃色が赤に白が黃になつたりする。さういふ場合は、無論「菊は黃に」でなければならないであらう。

又た一方から言へば、夕日のことを「日は斜め」といふたぐひで、自然よりうける印象と感じを重んずる——斜め、黃を印象し感ずる——當然の語勢でもあるのである。

この「疎そかに」を疎遠の意に解して、久しく雨の降らない、乾びた感じであるとするのはこの言葉にそぐはないやうである。乾びた感じを、わざ〳〵「雨」を點出して「おろそかに」で利かさうとする所以はないやうである。

西吹けば東にたまる落葉かな

蕪村作として、世間に有名になつた一つである。箒一本をかいた俳畫に、この句を題した僞作が腐る程ある。

中には、宇宙の眞理、人生の悟入を諷した、玄妙不可思議な句であるなどゝ解く者もある。

餘りに僞ファンが多いので、却つて反感を持つわけではないが、東とか西とか、たゞ機智を弄した痕跡をのみとゞめて、實際の感情の洞ろになつてゐる。淺薄さがまざ〳〵と感ぜられる。殊に「たまる」がいけない。西吹けば東になびくとか、誘はれるとかいふならば、風のまに〳〵飄々として落葉のあてどもない心持にもなるが、溜ると靜止してしまつては——或る時間をかけては——こしらへた實際らしくない、變に野狐禪的な氣取りになつてしまふ。

この句の再案らしく「北吹けば南あはれむ落葉哉」といふのがある。「あはれむ」の意が曖昧であるが、溜るの現實より句品はよくなつてゐるやうである。併し、いづれにしても誇るに足る作ではない。

「待人の足音遠き落葉かな」は落葉ふむ音を捉らへ、「古寺の藤あさましき落葉かな」は、落葉

の形を見てゐる。「春白のこゝろ落つく落葉かな」「茶袋を捨てる處も落葉かな」は住宅中心の風景。

鰒汁の宿赤々と燈しけり

「鰒」は「ふぐ」。漢字では鰒は「あはび」であるが、俳人はいつ頃からか、ふぐの意に使つてゐる。「河豚」が正しいであらう。

河豚は有毒魚ではあるが、其の味のいゝので「河豚は食ひたし命は惜しゝ」などの俗諺もある位有名である。

河豚汁をこしらへて、それを饗應する家に、赤々と、明るくさかんに、燈をともしてゐる光景である。

人にかくれて、こつそり食ふらしい河豚に、なぜ明か〳〵と灯をともしてゐるのか、又たそれを興のあることに思つたのか。大方怖わ〴〵箸する心持から、成るべく身邊を賑はしく、其の氣分を紛らす爲め、殊にいつもより灯を大げさにしてゐるのであらう、と作者が河豚を食ふ者の心を忖度して、却つて其明るさに、或る危險と恐怖を感じてゐるのである。

「ふぐ汁の我生きてゐる寢覺かな」の其の前夜の光景と見ればいゝであらう。

「昔なせぞ叩くは僧よふぐと汁」は、其の最中の一訪客であり、「袴著てふぐ喰てゐる町人よ」「河豚汁の亭主と見えて上座かな」「ふぐ汁の君よ我らよ子期伯牙」「玉川の歌口すさむふぐの友」「ふぐの贊先生之を揮はれたり」などは、其の明るい灯の下のそれ〴〵の姿と見るべきであらう。

併し、蕪村は恐らく河豚を食うた經驗はないらしく、いづれも餘處々々しい、お座なりの作が多い。

「逢はぬ戀おもひ切る夜やふぐと汁」「ふぐ食へと乳母は育てぬうらみ哉」など如何にも三文小說の筋書。

「ほとぎ——支那の食器——打つてふぐに亡き世の友とはん」「ふぐ汁や五侯の家の戻り足」の二句、蕪村辭はあるが、やゝ見るに足るといふべきであらう。

大魯が兵庫の隱栖を、几董とゝもに訪ひて、人々と海邊を吟行しけるに

凩に鰓吹るゝや鉤の魚

大魯は舊號馬南、安永二年大阪に移住して蘆陰舍を結ぶ、安永六年兵庫に移る。同七年京都に病歿す。其の兵庫隱栖中、几董を伴なうて遊んだのは、几董の日記には、安永七年三月十四日のことになつてゐる。當時の蕪村の遺作として

諸子とわだのみさきの隣松院に會す、題を採て偶春草を得たり、余不堪感慨、しきりにおもふ、王孫萬里今なほいづちにありや、故郷の春色誰のために來去す、王孫……君が遠遊に倣ふべからず、君が無情を學ぶべからず

我歸る路いく筋ぞ春の艸　右書似蘆陰舍　正　夜半翁

の畫賛一幅がある。兵庫を尋ねたのは、前後となくたゞ一度のやうに思はれるのであるが、ここでは冬にも遊んでゐる。尙ほ考ふべし。

「凩」は冬の始めの强風。

「鰓」は「えら」。魚のあぎとの中にある呼吸具。

「鉤」は「かぎ」。鳶口に類して魚をひつかける道具。

鉤にかけられて、鰓のあらはに見えるのが、木枯しの風に吹かれてゐる觸目の光景。凩が鰓を吹き出したかのやうに感じてゐる。

大抵の魚は鰓が赤味を帶びてゐる、殊に目につき易い。又た鉤にひつかけるところも、鰓のあぎとである場合が多い——少し大きな魚は尙更らである——。

これを蜑の軒先きに掛けられたものとしては、鰓と鉤を點出した效がない。まだ生きのいゝ生魚の可なり大きなのを、鉤にぶらさげて引きずつてゞも行く、其の鰓に氣をひかれたのである。そこらは寒い强風で吹きまくられてゐる中に。

生きのいゝ魚のつや〳〵した光澤、いくらか生臭い匂ひのするなど、朝市といふほどでなくとも、却つて冬らしい感じを——冬の爽やかな思ひを——誘ふやうである。

乾からびた干魚は、既に「秋風や干魚かけたる濱庇」がある。それとこれと句法の全く異なる點に注意したい。

こがらしやひたとつまづく戻り馬

「ひたとつまづく」は、馬の躓づくのを急迫して感ずる心持。事實はともかく、餘所には見逃がせない、ォヤ危ない、とつひ叫びたいやうな場合。「ひたと犬の啼く町越て踊かな」もある。

「戻り馬」は、一日の荷役を了つて歸路についた馬、身輕になつた心持もあるが、又た幾分疲

れてゐる趣きもある。作者は、飼ひに飼うた立派な馬でなく、骨張つた老衰の駑を見てゐるかも知れぬ。又た安心の心の綏みに生ずる落度、と言つたやうな、馬に對しての同情を籠めてゐるかも知れぬ。

風はさういふ場合の一背景で、舞臺で言へば、ふさはしい書割りをめぐらしたのである。

「こがらしや何に世わたる家五軒」は「五月雨や大河を前に家二軒」と同巧異曲。五月雨は、大河を前にと客觀化し、風には、何に世渡ると主觀を露出してゐるが、意味は略ぼ共通である。

「木枯や鐘に小石を吹きあてる」「木がらしや碑——いしぶみ——をよむ僧一人」、自然と人物、昔の動きと、繪畫的靜かさ、の區別はあるが、大景の中から一小シーンを抽出する手法。

「木がらしや岩に裂け行く水の聲」、「木枯や廣野にどうと吹き起る」、共に音響の雄壯感。

晋子三十三回

擂盆のみそみめぐりや寺の霜

「晋子」は寶井其角。其の三十三回忌は元文四年。

三十三はみそみ、回はめぐり。そこで味噌を呼び出して、寺の霜寒き中に、追福料理の味噌

を摺る意。例の言葉の掛け合せで、お座なりの句。味噌すり坊主などの俗諺も思ひ合されて、不眞面目にもとれる。

が、當時の江戸俳風は、この程度の駄洒落を寛容する、否面白い機智として迎へてゐた程であるから、强ち作者を咎めることも出來ない。蕪村の作として傳はるものゝ、恐らく最古のものであらう。

尙ほこの三十三回忌には、蕪村の師巴人の主催で、其角、嵐雪二人の追善集「桃櫻」が編れた。句は其の「桃櫻」に採錄されてゐるが、初五「摺鉢に」とあつて、句集と違つてゐる。——句集には「みそみめ」の「め」が脫落してゐるのは、几董の書寫の誤りであらう——。摺鉢の外に摺盆といふものがあるかどうか、又た既に公刊した書に掲出した句を——四十餘年も前の作を——後日改刪することがあり得るかどうか、この二點の疑問は、次いで他の疑問を生むのである。それは、「蕪村句集」編纂の時、几董が故意に筆を加へた部分がありはしないか、である。「摺鉢」といふより「摺盆」の方が、溫雅に見える——摺鉢は平俗にきこえる——といふやうな、几董の藝術觀が加つてゐないかの疑ひが濃厚なのである。其の他蕪村の草稿と相違する例は「藪入りの夢や小豆の」は「夢も小豆の」、「春雨や小磯の小貝ぬるゝほど」は「ぬれにけり」

「春雨や身にふる頭巾著たりけり」は「身の古頭巾」、「春の夜に尊き御所を守る身かな」は「春の夜の尊き」、「離別れたる身を蹈込で」は「さられたる身を」、「更衣野路の人はつかに」は「わつかに」、「蚊屋のうちに螢はなしてあゝ樂や」は「あら樂や」等々枚擧に遑ないと言つてもいいのである。それら悉くが几董の僭越な改刪であらうとは信ぜられないが、摺鉢のみそみめぐりの例から推すと、中に蕪村の激怒を買ふものがありはしないかを危むのである。

尤もそれらが、よし几董の意思の加はつたものであるとしても、到底字句の末節であつて、蕪村の創作本體に、さまでの影響のないことを强調しておきたい。又た几董も師名を思ふ後進の眞心からで、敢て地下に蕪村に見えた時、其の不遜の罪を謝する位の心構へであつたであらうことを信じたいのである。

初雪や消れば ぞ また草の露

榮花物語の歌に「玉の緒の長きためしにひく人も消ゆれば露になにかことなる」とある。この言葉をかりて、初雪のすぐ消えて、僅かに草に露おりたほどになる、の意。人の命のはかなさにまで思ひ至るのではないが、初雪のはかなさを歎いてゐる、むしろ俗情

に近い詠歎。

併し、かういふ句が、柔らかでいゝとする非詩人の方が、遙かに優勢であらう。

雪の暮鴫はもどつて居るような

水郷に住む閑寂な一心境。

「居るような」も、餘裕のある言葉。

秋には立つ鴫——鴫立澤の西行の歌など——であるから、今は戻つてゐるといふのではない。

鴫のやうな水邊の鳥と共に棲み、共に今日を樂しんでゐる感慨なのである。

鍋さげて淀の小橋を雪の人

「淀」は「花火せよ淀のお茶屋」の同じ淀。

淀にどういふ橋があつたかどうかは強て穿鑿の要はない。

「雪の人」、小橋を行くにかけて、雪中を行く人を點出した。

鍋をさげてゐる人物——大方女性——が、雪中の淀の小橋を渡りつゝある繪畫的場面、廣重

の繪を一層精彩にした觀がある。

この句「新花摘」に「發句とひら句——平句、連句中の句——とのわいだめをこゝろ得ること、第一の修行なり、ゆるかせにおもひとるべからず、平句の姿なれども、發句になる也」としてこの句を擧げてゐる。さうして「發句に似たる平句也」として「近江のや手のひらほどの雲おこる」を擧げてゐる。後句には季感の伴なはない爲め、一句の中心のないことを——附句を得て始めて魂がはいる——指摘してゐるのであらうが、これを見ても、可なり自信のあつたことが思はれる。

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

「宿かさぬ」は、泊めてくれない意。

「火影」は「ほかげ」。

昔は一人旅は泊めないといふやうなこともあつた。芭蕉の「奥の細道」にも曾良との二人旅ながら、風體を怪しんでか、宿をかさなかつたことが書いてある。

蕪村の東北旅行にも、さういふ經驗は度々あつたのであらう。雪は降りつのる、宿は斷られ

る、途方に暮れた中にも、雪中に燈の明りのさしてゐる光景を、何か美しいものに眺める餘裕を持つてゐるのである。

雪の曠野から、やつと人里にたどりついた時——やれ〳〵と思つて、宿を乞ふが、どこでもお相憎さまをくふ、困つたとは思ふが——の情意の動きであらう。

この句を一轉廻して「宿かせと刀投げ出すふゞきかな」がある。もう絶體絶命と言つた心持で、強行談判に入つたのである。

東北旅行と言へば、他に二三東北でなければならない雪景の句がある。「雪沓をはかんとすれば鼠行く」「雪國や粮たのもしき小家がち」「雪の旦母家の烟のめでたさよ」などがそれである。雪沓又た爪籠——普通の草鞋に藁の爪皮をつけてある——を穿く時、そこらを鼠のはしるなど東北大家屋の、しかも取り亂した光景、眞に迫つてゐる。「母家の烟」のめでたい心持も、これを三冬雪に壓されてゐる雪國に見て、はじめて肝に銘ずるのである。「かてたのもしき」も亦た然りである。

其の外「念ごろな飛脚過行く深雪かな」「雪折もきこえて暗き夜なる哉」「樂書きの壁をあはれむ今朝の雪」など、雪に對する情味の掬すべきものがある。

が、「初雪の底をたゝけば竹の月」「題七歩詩、雪折や雪を湯に焚く釜の下」の如きは、例の頓智と文字の洒落に終始して、をかしくも笑へない作である。——「底を叩く」は、箱や俵から物を出す時、最後に底を叩く、もうこれきりを示すから轉じて、實を言へば、眞相はかうだ、の俗語。初雪は降つても、それきりで、そらもう竹の月があざやかに見えるの意。「七歩詩」は支那の「世說」にある故事、東阿王といふ人が七歩あるく中に作つた詩が「煮豆持作羹、漉豆以爲汁、萁在釜中然、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急」といふのである。萁も豆も同根のものが一は燃され一は煮らる、と暗に肉親の間に存する恨を諷した意をとつて、雪を湯に焚けば、雪は釜中にあり、其の釜の下には同根とも見える雪折れしたものを燃すとの駄洒落。

町はづれいでや頭巾は小風呂敷

町のはづれに來て、いでこれから頭巾をかぶらう、それは今まで小さい風呂敷にしてゐたのを、と言ふ心持であらう。町中では、さすがに用捨してゐたが、もう見えも何も構はないから風呂敷を頭巾に——寒さ凌ぎに——被らうといふのであらう。

尤も「頭巾は小風呂敷」が、「頭巾を小風呂敷」とも解されるから、其の反對に、今までの頭

巾をはづして、小風呂敷に包んだ——町中では顏をかくしてゐたので、やゝ鬱陶しかつたが——とも見えないではない。いづれは頭巾を著る人の心持——寒いから被るか、鬱陶しいからとるか——によつて、兩解の成立することになる。

「貞文雜記」に「奇特頭巾」といふ頭巾の種々の考證をした後に「其後天和貞享頃專ら女の著たる頭巾にて、今時はきどくと呼り、又氣まゝとも言へり、五元集に「目ばかりを氣まゝ頭巾の浮世かな」といひしは、元祿のころなり、一代男双紙、天和頃「髮は水引かけて黑じゆすのきどく頭巾」一代女冊子（貞享三年）女奉公人藪入の處、きどく頭巾より目ばかりあらはし、誰袖海（元祿十七年）深う人目を忍ぶ見えてきどく頭巾に顏かくし云々、この畫のさまを見るに覆面をつけたるにあらず、今の風呂敷頭巾に似たるを頰かぶりしたるやうなり」とあるから、「風呂敷頭巾」といふものが實際にもあつたやうである。目ばかり出した氣まゝ頭巾に似てゐたといふから、風呂敷をすつぽり被つた——お高祖頭巾のやうに——ものらしい。

さすれば、風呂敷頭巾を被る方が正解といふことになる。郊外に出て、一寸はしやいで見る輕いうれしさなのであらう。

みどり子の頭巾眉深きいとをしみ

「みどり子」は嬰兒、幼ない子供。

「眉深き」「まぶかき」。

「いとをし」は「いとほし」が正しい。愛らしい。「いとほしみ」は、文法上から言へば、「いとほしさに」の意で、「つゝしみ」「つゝしむ」のやうな普通の動詞の變化とはならないのである。

が、この句は眉もかくれるほど深めに頭巾きた嬰兒を、如何にも可愛らしい、と愛情をよせたので、愛らしさに、どうしようといふのではない。作者は「いとほしむ」と言ひ切る以上の盡きない愛を含めて、餘韻を後に殘す言ひ方をしたのであらしい。又たこの句に限つて「いとほしみ」でなければならない、リズムと情緒があるやうである。

文法から言へば破格な用語であるが、詩にはそれを許容する好適例でもあるらしい。

蕪村も恐らく「いとほしみ」が文法上、どういふ意味になるか、深く穿鑿もしなかつたのでないかと思はれる。たゞ何となくさう言はなければならなかつた情緒の天籟的發語として、詩の爲めに無言の氣焰を揚げてゐる點に注意したいのである。

其の外「引かふて耳をあはれむ頭巾かな」は「頭へや掛けん裾へや」の衾の句に似てゐる。「さゞめ言頭巾にかづく羽折かな」、羽織を頭巾の上にかぶせて、二人喃々として語つてゐる艶體風景、「羽織着て綱もきく夜や」の柳風呂の娼家が彷彿としてゐる。「我頭巾うき世の様に似ずもがな」は孤高飄零の乃公をやゝ強調し過ぎてゐないであらうか。「頭巾二つ一つは人に參らせむ」淡々たる老情と友情。「頭巾きて聲こもりくの初瀬法師」。和歌に古びた枕言葉を、聲こもるに掛けたのであるが、山法師の荒くれたのでなく、優にやさしい「肘白き僧のかり寢や宵の春」の句中の主を偲ばしめる。

めし粒で紙子の破れふたぎけり

糊でもつかふことか、飯粒で紙子——紙で作つた防寒衣、下層民の著る——の破れを繕ろつた物臭さな佗住居の體。「めし粒で」と言ひ、「やぶれ」といふ言葉から、如何にも不器用な手つきと、繕ろひ方の大雑把さが偲ばれる。之を他の雅びた言葉、たとへば飯をいひ、やぶれをやれ——俳諧題叢にはさうなつてゐる——などゝ言つては、全然情緒が別なものになる。

かの曉の霜に跡つけたる晋子が信に背きて、嵐雪が懶に倣ふ

顔見せやふとんをまくる東山

晋子、其角の作に「顔見せや曉いさむ下邳の橋」がある。下邳の橋は、漢の張良が黄石公と出會つて六韜三略を授かつたところ。張良が二度目に朝早く霜をふんで石公を待つた故事に因んで、顔見せを見にゆく心持に喩へた駄洒落に近い句であるが、それを顔見世におくれまい信と見、嵐雪の蒲團著ての句をかりて、顔見世などどうでも寢た方がいゝと不精をきめ込むの前置。

さうすると、もう顔見世——十一月朔日、年中行事として興行した芝居、役者の顔も揃ふので、特に見物の樂みも深く、夜半より先を競うて出かける例でもあつた、京都ならさしづめ南北兩座である——に行く時分だ、と其の蒲團をまくりとつて起されたのである。さういふ即興を東山の蒲團をまくつた、と洒落れて言つたのである。

全然文字の洒落を主としてゐるが、顔見世に行く途中の見聞として、東山がほのぐ明けかけてゐる——蒲團をまくつたやうな——客觀的風景がほのかに眼に映じて來る。

嵐雪の懶にならうなどゝ言ひながら、其の癖蕪村も心いそぎして見に往つた、其の實情が——實際の見聞が——こゝに語るに落ちてゐるのであらう。

書記典主故園に遊ぶ冬至哉

「書記典主」「しよきてんじゆ」、禪僧の役名。

「冬至」「とうじ」、太陽が赤道以南最も遠き冬至線に至つた時、卽ち冬より春にならんとする一陽來復の第一歩。

「故園」は故郷の意。禪僧の故郷は、其の修業せしお寺——母校なみに母寺ともいふべきか——。禪寺では冬至の日、上ミ役僧より下モ小坊主に至るまで、日頃の宗規を無視する底の歡樂を盡くす例である。

書記典主も、以前捧喝を食つた道場に歸省して、この一日を樂むといふだけ。

事實を明らかにすれば、平々たる句意になつてしまふが、禪寺の年中行事などを素材——臘八など丶遂つて——にする著眼に敬意を表してもいゝと思ふ。

「新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな」——新右衛門は蜷川氏一休禪師に參禪せし人、蛇足は曾我宗譽、一休に畫を敎へし畫家——も前句と同巧異曲。一休を中心にして、三奇人の虎溪三笑的雅會を偲んだのである。——尙ほ日本人名辭書には蜷川親當と言つて、一休に參じた歌人又た畫

家であるとし、俗名新左衛門としてゐる——。

狩野法眼を「四郎二郎」の俗名で呼ぶと同じに、新左衛門蛇足の字面に興を催してゐるのでもあらう。

水仙や鵙の草莖花咲ぬ

「鵙の草莖」「もずのくさぐき」、百舌鳥が蟲又は蛙などを捕り、それを木の枝などのさきに突きさしたるもの。猿酒、鶏鮓など丶同じく、百舌鳥の食物貯藏法のよし。

伸びた莖の先きに花の咲く水仙を、恰も百舌鳥の草莖の花咲けるが如し、と奇拔な見立てをしたのである。

冷たく淋しく、どこか凸兀たる感じの相似なのであらうが、人の意表に出で、しかもたゞ度膽を拔く爲めのみでなく、何かさういふ心持のする、比喩的感興を喚ぶのはさすがである。

殊に「花さきぬ」と斷定的に言つてゐるのは、誇張した意味でなく、さやうな印象の强さを裏書きしてゐる自然の言葉で、一句の音調を力あるものにしてゐる。

「水仙や美人かうべをいたむらし」は、靑梅に眉あつめたる美人の他の裝ひ、「水仙や寒き都の

こゝかしこ」は、四條の店頭にも見、高臺寺の竹垣の中にも見つけたのであらう。

葱買て枯木の中を歸りけり

身邊雜事を苦もなく投げ出してゐるやうであるが、枯木——葉の落ちた樹——の中を感ずる、さうしてそこに葱を感ずる、心の動きは可なりに細かい。底をたゝいては何でもなくなるけれど、枯木の中に來た、靜かさと淋しさとヒヤリとした、何だか獨りぼつちになつたやうな、物に圍はれたやうな、不圖した氣分の動きに、今まで氣にもとめてゐなかつた葱の香ひが、ほのかに鼻頭に漂ひ、白根のしろさ、つや〳〵しさが眼底に蘇つて來る、とでもいふ場合である。棒のやうな句であつて、味へば、敏感の顏へが內面に深く〳〵織り込まれてゐる。

「易水に葱ながるゝ寒さかな」——風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還、荊軻を歌つた有名な詩句——などの機智を主としたものより遙かに情緒的である。

「ひともじの北へ枯れ臥す古葉かな」——ひともじは葱の和名——も細かい觀察である。蕪村はよく「北」とか「南」とかの方角を使つてゐるが、漢詩の東西南北人などゝいふ漠然たる意味でなく——梅遠近南すべく北すべく、などはこの漠然たる意味を繼承してゐるが——明らかに北の方角を印象するこの句のやうなのは珍らしい。「北に向く人はまづしき頭巾かな」といふのもある。恐らく關西で、道を敎へるにも、左右を言はず、東西南北の方角をいふやうに、方角に對する認識の强く細かい現はれなのであらう。

皿を踏鼠の音のさむさ哉

さゝやかな音も、鼠のふむと感ずる、それは皿を點出して、一層あざやかである。天井に轟音を立てる鼠よりも、神經を刺戟する音である。

「しぐるゝや鼠のわたる」零上の音、又た別に「寺寒く樒はみこぼす鼠かな」の惡戲と共に、鼠に對する敏感な作者であることを語つてゐる。

寒さの句には「我をいとふ隣家寒夜に鍋を鳴らす」「漁家寒し酒に頭の雪を燒く」など、漢詩的の境地、措字の妙は漢詩に勝るものあらんか。

「鐘老い聲饑ゑて鼠樒をはみこぼす」寒夜と題して、麥水の「新虛栗」に應じた作ほどあつて一上一下巧みに劍を舞ふ觀がある。

冬こだち月に隣をわすれたり

夢想の句と斷つてある。夢中に得た作であるから、意味の捕捉し難いものゝあるやうで、却つて極めて印象的な感興の躍如たるものがある。

冬木立の月皎々たるに浸つて、隣家のあることも隣人の棲む生活も、呆心して意識に上らないのである。郊外生活の——平生は隣人を頼りとしてゐる——時に空虛を感ずる心の閃めきなのである。

これ亦た人生の一波瀾否一默示、生活實相の一斷片である。

「二村に質屋一軒冬木立」も同じく夢中の作であるが、前句に比して幾分常識が働いてゐる。前句を深夜熟睡中の作とすれば、これは眠りの將に醒めんとする拂曉の作であらう。

冬木立の句は其の他の「この村の人は猿也冬木立」「斧入れて香に驚くや冬木立」も共に力が外面に出過ぎてゐるやうである。「鶯に美を盡してや冬木立」は京都龍安寺の寫生句であるが、寶曆初年蕪村が京都に上つた當時の作だけに、初期の臭ひが強い。

木のはしの坊主のはしやはちたゝき

「枕草紙」に「思はん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいと頼もしきわざを、たゞ木の端などのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ」とある言葉をかりてゐる。

鉢叩は、僧形にて有髪、瓢などを叩き、念佛らしいものを口ずさんで憐みを乞ふ、乞丐の一種、空也上人の徒弟であるともいふ。中には茶筌を賣るやうな者もあつた。

あたりまへの坊主でも、木のはしと卑しめられるが、其の坊主の又たはしのやくざな鉢叩と表には罵るやうに言つて、心持は其のやくざ坊主を憐んでゐる。

蕪村畫の小品に、頭の後方に頭巾を被り、左手に瓢簞、右手に箸位の棒を持ち、身に小坊主の著るやうな衣をつけ、膝から下兩脚を露出した、顏中に皺のある老人を描き、それに「乾鮭も空也の痩も寒の内　翁」「長嘯の墓もめくるや鉢たゝき　翁」「箒こせまねても見せむ鉢叩去來」「傘のやぶれ後光や鉢たゝき　百川」と外に「ゆふがほのそれは髑髏歟はちたゝき」「木のはしの坊主のはしや鉢たゝき」此二句蕪村、と題句をした一幅がある。鉢たゝきといふ者が蕪村時代どういふ風俗のものであつたか一見明瞭であるばかりでなく、其の老顏風姿に、溫厚

酒脫味があつて、所謂乞食坊主の醜態は見られない。自分が若し鉢叩になるとすれば——イヤ一つ間違へば、なつてゐたかも知れない——こんな風だらうと筆を執つた理想畫のやうでもある。自然其の題句も亦た一場の罵詈諸謔でもないのである。

御火たきや犬も中〳〵そゞろ顔

「御火たき」は京都に限られた神事のやうである。十一月又た十二月各神社にて、火を焚く神事を擧げ、主として小兒に供物などを與へる儀式。火に緣のある商家、料理、染物、鍛冶などの家々にても火を焚き祝ふ。其の由來は判然しないやうであるが、追ひ〳〵火に親しむ時候であるから、火の祟りを呪ひ、お互ひに警戒する心持なのであらう。

御火焚きが主として子供を集めるお祭りであるから、犬もなか〳〵お仲間の顏して、よろこんでゐるといふ、眼前の光景。「そゞろ」は氣のはやる形容である。

普通は晝間午後に行はれるが、時として早朝又た夜分にも行はれる。で「御火焚や霜うつくしき京の町」と、霜上の火の潔さを謳つてゐる。

足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉

足袋はいて寢ると親の死期にあはぬ、とか氏神に見はなされるといふ俗諺などのある位で、普通にはせぬことである。大方自墮落を戒めたのであらうが、老境に入つて、足が冷える、火燵も湯婆もしてもらへない、已むなく足袋をはいて寢たといふやうな場合、餘りいゝ心持のものでもなかつたが、やがて惡夢に襲はれて、おち〳〵安眠も出來なかつた、不愉快な心持である。

今少し其の心持を、餘裕を持つて見て、やゝ玩弄する氣にもなつて、言葉の洒落でも挿みさうであるが、むしろ平易に、正直に、ありのまゝを叙してゐる。さすがの蕪村も、惡夢に壓倒されて、つく〴〵閑口した爲體である。

「眞結びの足袋はしたなき給仕哉」の方は、大分朗らかである。昔はコハゼといふものがなくて、どれも皆紐足袋で、足くびの處を紐で結んでゐた。眞結びにむすんだ紐のはしが、だらりと垂れて不釣合に足袋の恰好を損じてゐるのである。

貧居八詠

愚に耐よと窓を暗す雪の竹

かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥

我のみの柴折くべるそば湯かな

紙ぶすま折目正しくあはれ也

氷る燈の油うかゞふ鼠かな

炭取のひさご火桶に並び居る

我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす

齒豁に筆の氷を嚙む夜哉

八詠九詠などいふのは支那に始まる。白樂天の詩句に「登樓詩八詠、置硯賦三都」韓退之に「可憐物色阻携手、空展霜縑吟九詠」などゝある。素堂に「荷興十首」があり、其角にも「秋興八詠」がある。

第一句は、雪に壓された竹が、我が愚かさを辛棒しろといふやうに、窓を暗うする。まア馬鹿者で閉居してゐる方が、結局世間のうるさゝがなくていゝ、とでもいふ生活感懷。

第二句、寒苦鳥の事は歳事記によると、印度大雪山に鳥あり、此鳥夜寒を苦みて、鳴聲寒苦身を責む夜明けなば巣を作らんといひ、夜明くる時は、また今日死するかも知れぬ、無常の身を何が爲めに勞しようやと巣を作らず、夜に至つて又た寒苦身を責む明日巣を作らんと鳴く、明日になれば又た巣を作らぬといふ、佛經にある奇鳥のことである。閑苦鳥の方が寒苦鳥に比して、賢くて且つ賤しい、我は寒苦鳥に左袒する、の意。

第三句、自分だけの蕎麥湯を作る爲め、柴を折りくべて火をおこす。心しづかに佗びた趣。

第四句、紙で作つた蒲團の折目がキチンとついてゐるのが、却つて哀れをさそふ。粗末なものであるから、皺くしやにでもしてありさうであるが。

芭蕉の古衾を、大垣の竹戸といふ俳人が貰つた。曾良がそれを裏書きして「疊目は我手のあとぞ紙衾」と作つたのは「猿蓑」の中の一佳話であつた。

第五句、燈も氷る思ひの寒夜の鼠、まざ〳〵油をうかゞふらしく出沒する。油をなめるの意でなく、燈下をうろつく樣、油を狙ふものらしく感ぜらるゝのであらう。

第六句、炭取にした瓢簞と、火桶が並んでゐる、坐右たゞそれのみの意であらう。蕪村には炭團を夜毎一つ宛食ふ火桶である、炭取にも足のつく夜があるかも知れぬ。

第七句、鍋尻の煤でも掻く音が、イヤに耳立つて聞えるのであらう。それとも、暖かい汁物でもすくふ鍋底の音か。平生氣にくはない隣人のすることである、無意識の行爲も亦た有意識に認識される。

第八句、コチ〳〵に凍つた、老衰の亂杭齒、自分にも、其のとげ〳〵しい崢嶸たるところが見える思ひなのである。

この句、大魯に與へた手紙に、大魯の「ともし火に氷れる筆を焦すかな」を推稱して「愚句に齒あらはに筆の氷を嚙夜哉と、貧生獨夜感をつぶやき候、子も亦寒燈に狸毛を焦したるあはれいはん方なく候、よき兄弟と存候」とある。

以上の八詠、取材、音調、描字、それ〴〵に風格を異にしてゐる。作者相應苦心の跡を見るべきである。が、其の苦心程、肺腑を衝く底の作に接しないやうである。貧を强調するに急であつて、貧を樂む餘裕を缺いた爲めでないであらうか。

一しきり矢種の盡るあられ哉

「矢種」「やだね」。

一しきりサアと降つて止む霰を、軍兵の矢を射るに譬へたのである。單に音ばかりではない霰の降りそゝぐ時、眼の錯覺で、矢の一齊射、矢ぶすまのやうにも見えるのである。

霰の長く降りつゞかない、併しながら降る時の勢ひの猛け〳〵しさ、それを感じてゐるのである。

「玉霰漂母が鍋を亂れうつ」韓信を勵まして食を與へた洗濯婆さんの故事を出典として、易水に葱の如く、霰を配して、當時の樣を追憶してゐる。さうして、同時に自家貧厨に思ひをよせてゐる。「玉霰」の「玉」が、作意を表面化してゐる憾みはあるが。

古池に草履沈てみぞれ哉

普通沈んでゐさうもないものが、不圖眼にとまつたのであらう。草履と意識するそのものに降りそゝいでゐる霙との、何といふことのない融和——寒い心細さと言つたやうな——を感じ

たのであらう。もつと印象的であるべきを、「古池に」と概念化した嫌ひがあるやうである。

當時の草履に、白い又は赤い鼻緒といふやうな、色彩感を唆るものでもあつたのか、この句面では判然しない。

倣素堂

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり

「素堂」は芭蕉の友の山口素堂、それにならう、といふ前書。

「琴」には右側に棒を引て、「きん」と音讀させてゐる。「みなし栗」に、素堂の「荷興十首」、蓮の連句十首が載つてゐる。中に「浮葉卷葉この蓮風情過ぎたらん」があつて、「れん」と音讀させる。それにならうの意である。

乾鮭といふものゝ鹽びたしな、魚の生氣もない、一木片に過ぎないやうなものを見てゐると——若しそれを打てば——琴に斧を打つが如き響を發する心持がするといふのである。

晉書戴逵傳に「逵少有二文藝一、能鼓レ琴、武陵王聞二其能一使レ召焉、逵對レ使破レ琴、曰安道不レ能レ作二王門伶人一」、又た「淮南子」に鍾子期と伯牙の交りを記して「子期死而伯牙絶レ絃

破レ琴」とある。必ずしもさういふ故事に因んだのでないであらうが、淵明の無絃琴などの聯想もあつて、琴のやうなやさしいものに、斧といふガサツな刄物をあてる——琴は恐らく異樣の音を立てゝ容易に破毀されるであらう——、無謀の極致、却つて有情の韻を成すと言つた心持も潜んでゐるのであらう。

要するに、乾鮭の異樣な風體に對する高踏詩人的感懷の、突き效したやうな大膽な表現である。だから、こゝでも「琴に斧うつ響きあり」と卒直に言ひ放つてゐる。

其の外「年守るや乾鮭の太刀鱈の棒」があり、「からさけや判官殿の上り太刀」があり、「風呂敷に乾鮭と見しは卒都婆かな」があり、「乾鮭の骨にひゞくや後夜の鐘」があり、「佗禪師乾鮭に白頭の吟を彫る」があり、尋常と見ゆるのは「乾鮭や帶刀殿の臺所」「乾鮭の片荷や小野の炭俵」位のものである。

鐵骨といふは梅の枝を寫する畫法也

寒梅や火の迸る鐵より

梅の枝を描く畫法に鐵骨といふのがある——大方「芥子園畫傳」にでもあるのであらう——

その鐵の字から思ひついて、寒梅――寒中に咲く梅、又た早梅ともいふ――の花の咲いてゐるさまは、丁度鐵骨法で描いた枝の鐵から、火花のほとばしつてゐる――鍛冶屋で鐵を擊つ時火花がはしる――やうだ、の意。

眞黑なゴツ〳〵した枝に、眞白な氷るやうな花が、とび〳〵についてゐる、其の黑白の餘りにカツキリした色彩の反映が、迸る火花の感を唆るのであらう。

琴に斧打つひゞきと言ひ、奇想天外より落つ比喩といふべきである。

寒月や衆徒の群議の過て後

「衆徒」「しゆと」、「平家物語」や「源平盛衰記」にある、叡山や三井寺などの僧兵の群。僧兵が評定をする物々しい光景も過ぎた後の寒月一輪の靜寂。褒味も一段と加つてゐる。

この外に寒月の句いゝくつもあるが、蕪村作として特にとり出でゝ推稱する程のものがない。

「寒月や枯木の中の竹三竿」位が變つた趣きである。枯木の中の三本の青い竹が、きわどく眼立つのである。月の寒い光りが、其の竹の葉に照り返つてゐる。尙ほ深草の元政上人といふ變つた僧の墓は、竹三本植ゑたといふ故事があるので、それを思ひよせてゐるのかも知れぬ。

寒ごりやいざまいりそふ一手桶

祈願の爲め、又は修業の爲め、身を淨める水垢離をとる。瀧の水に打たれることもあり、井戸の水を浴びることもある。寒中の最も寒い時に行ふを寒垢離といふ。

寒參りと言つて、酒木綿の淨衣一枚を纏うて不動堂に參り、其の境內の水を浴びて歸る、それを寒中一日も缺かさず行ふ例もある。「寒垢離や上の町まで來りけり」は、さういふ寒參の場合であらう。

「いざ參りそふ」は、これから水を浴びようとする心のはづみを現はしてゐる。「そふ」を「候」――軍記物などに、何々候といふを略して「そふ」といふ――の意に解すると、「添ふ」卽ち添へるに解するの二樣ある。

候に解すれば、最初の――これから浴びる第一の――一手桶に關心を持つことになり、添ふに解すれば、一通り浴びた後の、今一手桶といふ意味になる。

「いざ」といふ發語から言へば、いざこれからの意があつて、候解に適切であるが、一手桶の一に重きをおけば、添ふ解が生きるやうである。

いづれにしても、水を浴びる寒垢離者自らの心持を言つたので、他から水を浴びせたりする場合の言葉ではない。

單に水を浴びると直接に言はず、いざ參りそふ、と雅語めかして言つたのは、敬虔な精進な心持を現はさうとしたのであるかも知れぬが、却つて輕い戯れた氣分を誘ふやうである。少くも獻心的でなく、やゝ興がつた餘裕を存してゐる。或は寒垢離の實際は、その位の隙のあるものかも知れぬが。

几董判句會

鯨賣市に刀を鼓しけり

几董の判をする句合せに、かういふ句を出した、といふだけの前置。こんな前置は取り去るを妥當とする。

見馴れた魚賣りなどより、眼新らしい鯨賣りの方が威勢がいゝのであらう。それに鯨といふ雄偉な形容を想ひ浮べて、庖刀を刀のやうにも、其の刄音を鼓を打つやうにも思ひなしたのである。

かく誇大に形容するのは、其の鯨賣りの所作に、多少の滑稽味を帶びてゐるからであらう。

椹木町といふのが、昔は京都の魚町――魚市場――であつたといふから、冬に入つての鯨賣りは、其の市場の異風景をなしてゐたのかも知れぬ。

藥喰隣の亭主箸持參

「藥喰」「くすりぐひ」。昔は汚れを嫌つて、肉類を食することを忌んだ。冬になつて、鹿、猪、兎の類を、寒さ凌ぎの意味に、藥喰ひと言つて食する例であつた。猪を山鯨と言ひ、牛肉を田猪など言つた。無論大ぴらに食ふのでなくて、隱れて窃かに行ふ例でもあつた。

この隣の亭主、既に再三のことで、味を占めてゐるらしく、箸を御持參で、其の席へ罷り出た、用意のよさで、一坐を笑倒したでもあらう。この亭主の鼻うごめかした舌なめずりも見えるやうである。

「箸持參」など詰つた言葉で、其の所作をも現はしてゐる巧妙さに驚かされるが、これは其角に「此花に誰あやまつて瓜持參」などの先例があるのである。併し、其角と違つて、言葉を言葉としてゞなく、作者の情緒にそぐふものとした蕪村は、言葉の活用に數段の進歩を見せてゐる

ると言つていゝであらう。

この外「しづ〳〵と五德するゑけり藥喰」「客僧の狸寢入りやくすり喰」「妻や子の寢顏も見えつ藥喰」などあるが、聊か態とらしい。「藥喰人に語るな鹿ヶ谷」は、鬼界島に流された俊寛、康賴等の鹿ヶ谷の會合を思ひ寄せ、殊に鹿の字を點出して、言葉の駄洒落に落ちた。

にしき木の立聞もなき雜魚寢かな

「にしき木」「錦木」。昔奥羽の習慣に、思ふ女の門べに錦木を立てたことがある。それを取り入れゝば承知したことになり、とり入れねば幾本も〳〵、千束になるまで立てた、と深草少將もどきの傳說がある。謠曲「錦木」は其の哀話を脚色してゐる。——錦木といふ灌木又の名まゆみでなく、斑らに色どつた杖のやうなもの——。

それから轉じたのであらう、新婚夫婦の閨房を監視する女を錦木ともいふよし。

「雜魚寢」「ざこね」。歲事記に「十二月三十日大原村の雜魚寢とは、蛇井手村の大淵といふ池に蛇住みて、をり〳〵里にて人をとらんとす。其のあるく時は晝夜を分たず、男女一所にあつまり臥してかくるゝなり、これを大原の雜魚寢といふ、その夜男女かたらひをなすとなり」とある。義太夫にある辨慶とおわさの情事は、月待の夜の雜魚寢であつた。

雜魚寢の醜感を糊塗せんとして、錦木といふ美しい名のものを持つて來たゞけの作らしいが「立ちぎゝもなき」で、却つて醜感を助長したやうである。

御經に似てゆかしさよ古暦

もう用の無くなつた廢物の古暦に對する感謝と、捨てるに忍びない或敬虔な心の表現である。

俗人には普通用のない經文を手にした心持、用はないながら、他の雜書と違つた尊敬の感觸、人情の機微に觸れるものがある。

「十日まり日和つゞきて古暦」といふのもある。十日餘り日和がつゞいた、といふ天候と、捨てる古暦と何の關聯ありや、と問ふやうなものに、俳句の妙はわからないと言つてもいゝであらう。年末におしつまつて明朗な天氣のつゞくのを、今年も無事に穩やかに暮れる、と暦と共に喜ぶ心持なのである。暦といふものゝ性質から言つても、陰鬱に暴れる日がつゞくより、明朗な日のつゞくのを、役目を無事に果した心持になるのであらう、思ひやりをも含んでゐるのである。强めて言へば、暦の役目も、有終の美をなした思ひであらうと。

うぐひすの啼や師走の羅生門

「羅生門」京都——平安城——の南の正門、朱雀大路の中心に當りて、朱雀門と對してゐた。南北二丈六尺、東西十丈六尺、南北石階各七丈五級、階外の溝に石階を架す……二重閣製、瓦屋根、屋上鴟尾を置く、閣の中央に額を掲げ「羅生門」といふ、丹艧粉壁、平安京第一の大門であつた。が、弘仁七年八月の大風に倒れ、一度修築されたが、平安京の衰へるに從つて荒廢し、盜賊の棲家となつたことなど「今昔物語」にも書かれてをり、又た鬼神が出たといふ渡邊綱に關する傳說も有名である。

鶯の啼くやは或る幻想なので、急がしい京の町も羅生門近くになれば、森閑として靜まりかへつてゐる、物の怪の出さうなおどろ〳〵とした感じもなく、鶯でも啼きさうな、又た啼いたらしい聲がした、忙中閑と言つた心持なのであらう。

「啼や」と斷定するのは、例の語勢を强める、幻想を自己の直感としての直寫である。が、少々人の意表に出ようとする作意なきにしもあらずであらう。

笠著てわらぢはきながら
芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず

芭蕉の「年暮れぬ笠著て草鞋はきながら」といふ句、貞享元年の「甲子吟行」といふ芭蕉最初の紀行中にある。八月江戸を立つて、九月故郷伊賀に歸り、後大和山城近江美濃伊勢を經て尾張に入り、其の年を送つた時の吟。

年の暮になると、芭蕉のこの句がいつも想ひ出される。句を想ひ出すと同時に、いよ〳〵芭蕉が親はしく、又た難有くなる。嗚呼芭蕉一たび逝いて、其の後、年の暮らしい感じを與へてくれる作家も出て來ない、卽ち年の暮れる思ひをさせてくれない、と言つた心持。それを「年くれず」と氣分を言として言つたのである。

佛敎の方に、釋迦既に去つて彌勒未だ進まず、と釋迦亡き後佛法の振はざるを歎ずる語がある。芭蕉去つて、俳句の振はざるを歎ずる意が、却つてこの句の主旨であるかも知れぬ。婉曲な言ひまはしであるが、平生芭蕉に心から傾倒してゐる者でなければ——たゞ表面偶象化してゐるのではない——吐き得る感懷ではない。

尙ほこの句の前書とも見える短文がある。

名利の街にはしり、貪欲の海におぼれて、かぎりある身をくるしむ。わきて、くれゆくとしの夜のありさまなどは、いふべくもあらず、いとうたてきに、人の門たゝきありきて、こと〳〵しくのゝしり、あしをそらにしてのゝしりもてゆくなど、あさましきわざなれ、さとて——さりとて——おろかなる身は、いかにして塵區——浮世——をのがれん、としくれぬ笠著てわらじはきながら、片隈によりて此句を沈吟し侍れば、心もすみわたりて、かゝる身に、あらばと、いと尊く、我ための摩訶止觀——教化——ともいふべし、蕉翁去て蕉翁なし、とし又去や又來るや。

とある。笠著て草鞋はきながら、に超世間の安心立命的心境の籠められてゐる處をも渴仰してゐる。句を見てゐるのでなくて、芭蕉を見てゐる、言葉を感じてゐるのでなくて、人間を感じてゐる蕪村の眞骨頭を窺ふに足るともいふべきである。

——評釋終り——

蕪村名句評釋索引

春

商人を吼る犬ありもの〻花……七〇
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉……七六
足駄のわたりて濁る春の水……四七
宵柳や我大君の草か木か……二一
几巾きのふの空のありどころ……七〇
出べくとして出ずなりぬうめの宿……三二
岩に腰我顔光のつゝじ哉……六七
うぐひすのあちこちとするや小家がち……一四
營や茨くゞりて高う飛ぶ……二一
うぐひすや家内揃ふて飯時分……一九
營か雀歟と見しそれも春……一八
うつゝなきつまみごゝろの胡蝶哉……六六
かげろふや簀に土をめづる人……五四
甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花……八〇
きじ啼くや草の武藏の八平氏……五八
木の下が蹄のかぜや散さくら……七三
公達に狐化けたり宵の春……四二
蓼盗む女やは有おぼろ月……四四
紅梅の落花燃らむ馬の糞……六〇
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺……五九
さくら狩美人の腹や減却す……七八
指南車を胡地に引去る霞哉……四五
柴刈に碧を出るや雉子の聲……五七
しら梅や北野の茶店にすまひ取……三三
白梅や墨芳しき鴻臚館……三〇
捨てやらで柳さしけり雨のひま……二四
遍日に燈を呼聲や春の雨……四八
玉人の座右にひらくつばき哉……五三
たらちねのつまゝずありや鍬の鼻……六九
つゝじ野やあらぬところに麥畠……六七
つばくらや水田の風に吹れ貝……六二
蟲啼て夜蛇を打つ小家哉……六五
出る杭を打たうとしたりや柳かな……二五
飛かはすやたけごゝろや親雀……六一
なには女や京を寒がる御忌詣……三六
菜の花や鯨もよらず海暮ぬ……八三
菜の花や笋見ゆる小風呂敷……八三

菜の花や月は東に日は西に……八二
苗代や鞍馬の櫻ちりにけり……七九
にほひある衣も疊まず春の暮……七八
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨……五〇
箱を出る顔わすれめや鍬二對……六八
はた打よこちの在所の鐘が鳴……五六
畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ……五五
初午やその家〳〵の袖だゝみ……五三
花に來て花にいねぶるいとま哉……七七
花に遠く櫻に近しよしの川……七四
花の御能過て夜を泣く浪花人……七五
はるさめや綱が袂に小でうちん……五二
春雨やもの書ぬ身のあはれなる……五〇
春雨やものがたりゆく蓑と傘……五一
春の海終日のたり〳〵哉……六一
人なき日藤に培ふ法師かな……八一
日は日くれよ夜は夜明けよと啼蛙……六五
二もとの梅に遲速を愛すかな……二七
蛇を追ふ鱒のおもひや春の水……四六
ほうらいの山まつりせん老の春……一二
物種の袋ぬらしつ春のあめ……四八
やぶ入の夢や小豆の煮るうち……三八
藪入りや餘所目ながらの愛宕山……三九
やぶいりや守袋をわすれ草……四一
行春や撰者をうらむ哥の主……八五
夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人……七一
壺ふさぎや床は維摩に掛替る……八五
壺寒で南阮の風呂に入る身かな……八四

夏

飴くれてよらで過行夜半の門……一〇九
宵梅に眉あつめたる美人哉……一三三
いづこより礫うちけん夏木立……一四四
愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら……一三一
閻王の口や牡丹を吐んとす……九七
御手討の夫婦なりしを更衣……九一
おろし從笈に地震なつ野かな……一四六
かきつばたへたりと蔦のたれてけり……一〇八
掛香や啞の娘のひとゝなり……一六三

川狩や樓上の人の見しり貝……一六七
かはほりやむかひの女房こちを見る……一三四
更衣野路の人はつかに白し……八九
蚊の聲す忍冬の花散るたびに……一二四
雷に小屋は燒れて瓜の花……一六一
蚊屋の内にほたる放してアヽ樂や……一三三
蚊やりしてまいらす僧の坐右かな……一二四
狩衣の袖の裏這ふほたる哉……一五〇
閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ……一〇六
絹著せぬ家中ゆゝしき更衣……八八
狂居士の首にかけたる歟鶏鳥……一〇四
草いきれ人死居ると札の立……一五七
鷹風やともしたてかねついつくしま……一七〇
こもりゐて雨うたがふや蝸牛……一五一
酒十駄ゆりもて行や夏こだち……一四五
さみだれや大河を前に家二軒……一四一
さみだれや佛の花を捨に出る……一四三
子規柩をつかむ雲間より……九四
しのゝめや鵜なのがれたる魚淺し……一五三
椎の花人もすさめぬにほひ哉……一三九
耳目肺腸ここに玉卷ばせを庵……一三二
涼しさや鐘をはなるゝかねの聲……一六六
砂川や或は夢を流れ起す……一二四
石工の鑿冷やしたる滯水かな……一五六
寂として客の絶間のぼたん哉……九九
絶頂の城たのもしき若葉かな……一一九
筍の藪の案内やおとしざし……一三七
橘のかごとがましきあはせかな……九一
蓼の葉を此君と申せ雀鮓……一二五
たのもしき矢數のゐしの袷哉……九〇
大佛のあなた宮樣蟬の聲……一六三
地車のとゞろとひゞく牡丹かな……一〇〇
手すさびの圓畫かん草の汁……一六五
殿原の名古屋顏なる鵜川かな……一五三
飛石も三つ四つ蓮のうき葉哉……一五八
堂守の小草ながめつ夏の月……一六〇
夏百日墨もゆがまぬこゝろ哉……一五四
なれ過た鮓をあるじの遺恨哉……一二九

昭和九年十二月十一日印刷
昭和九年十二月十四日發行

蕪村名句評釋
定價壹圓三拾錢

著作者　河東碧梧桐
發行者　東京市小石川區表町一〇九　加藤雄策
印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

發行所　東京市小石川區表町一〇九
振替東京三六三三九　非凡閣
電話小石川(85)六六一〇

共同印刷株式會社印刷

673
8

終